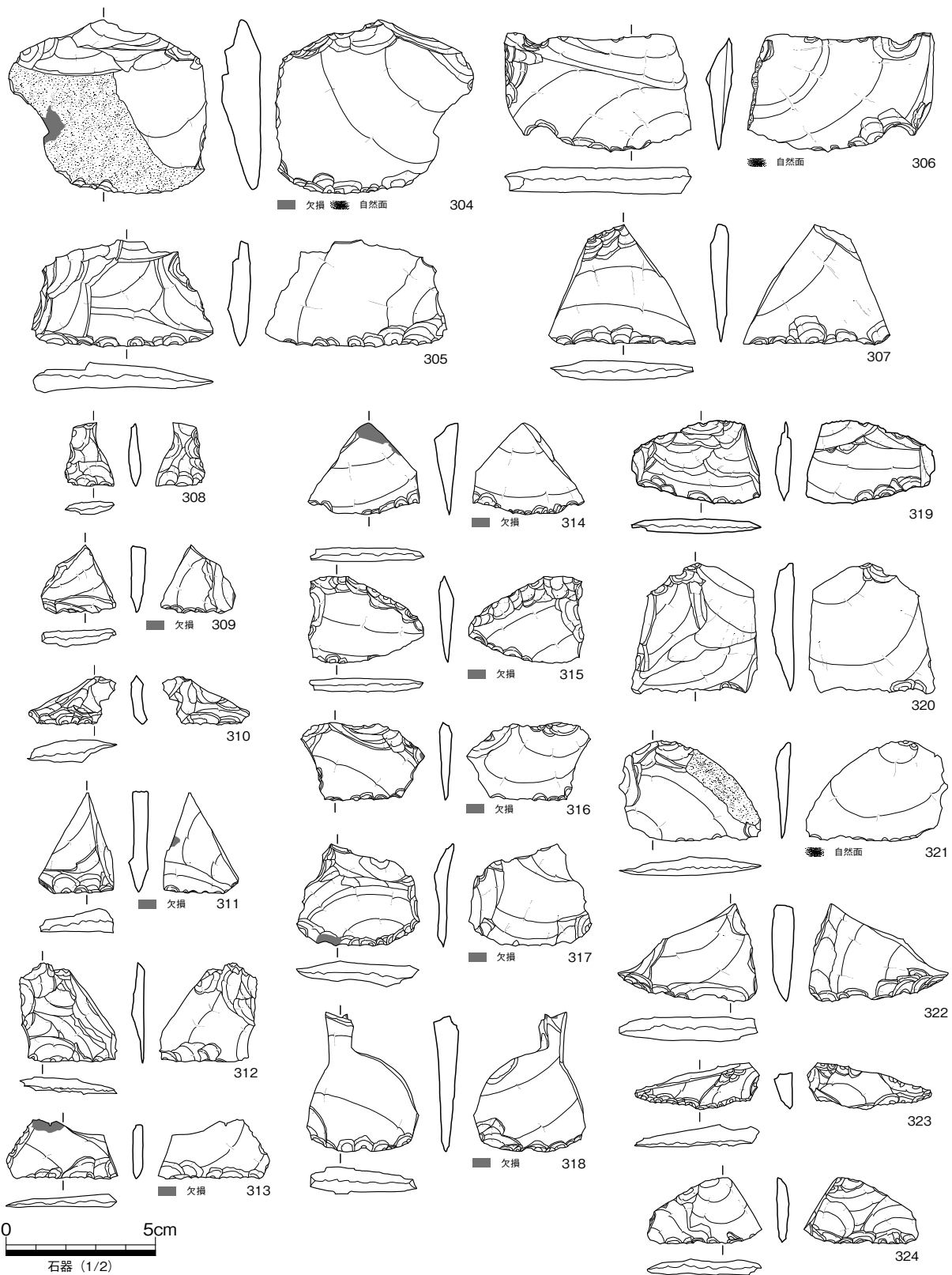


第 42 図 SD24 出土遺物実測図 15



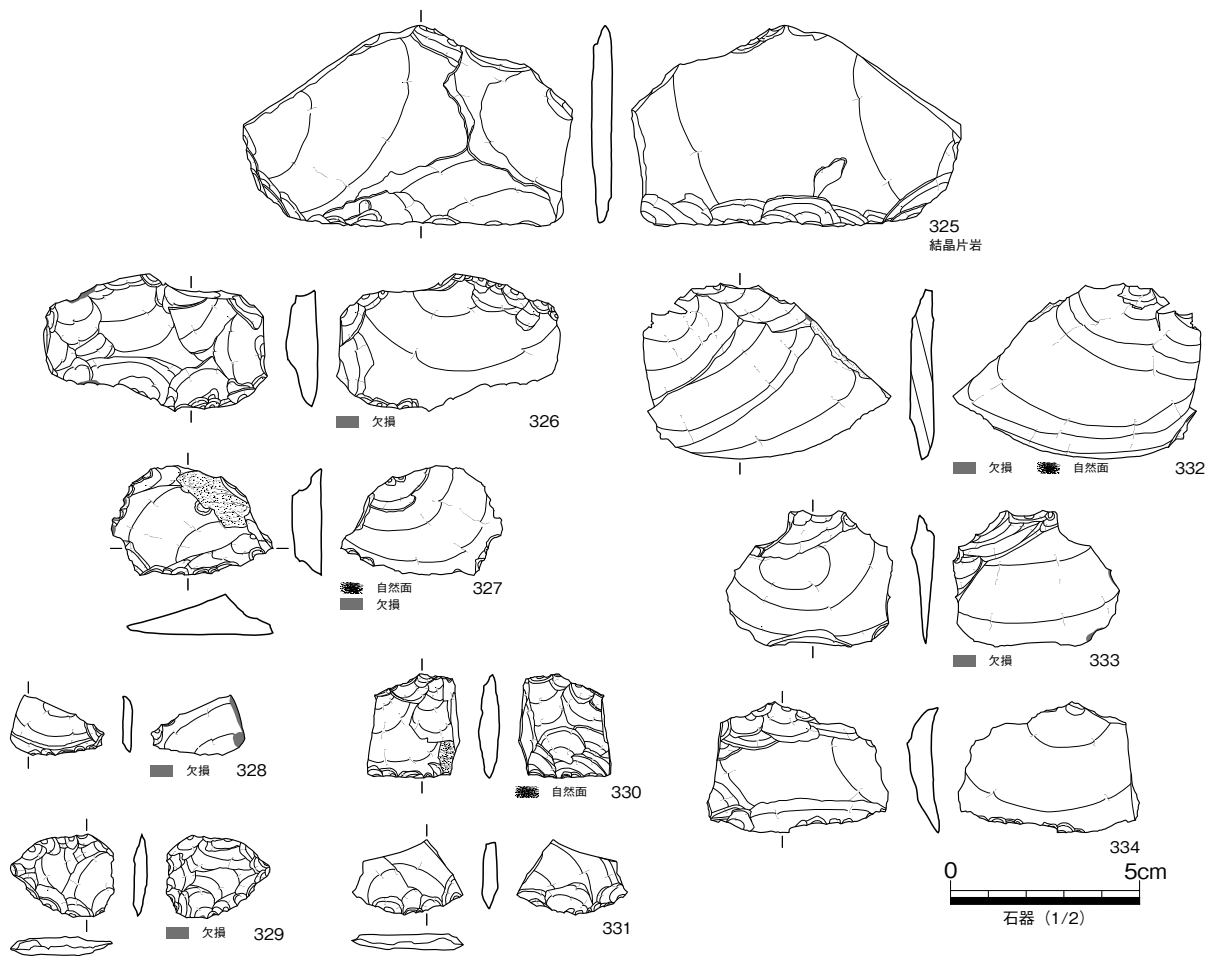
第 43 図 SD24 出土遺物実測図 16

施される。267～270の口縁端部は外面とやや内面に拡張する。271は、外側に屈曲する口縁部の下位に突起を有する。272～274は胴部から若干内傾して口縁部に至る。272の口縁部直下の外面には強いナデによる沈線状の窪みが数条形成されている。273・274では3条の沈線が口縁部直下に施される。内外面のヘラミガキが密である275の内面には、沈線状の施文が認められる。276は底部に面をもたないが鉢とした。277は小型で球状に近い器形である。

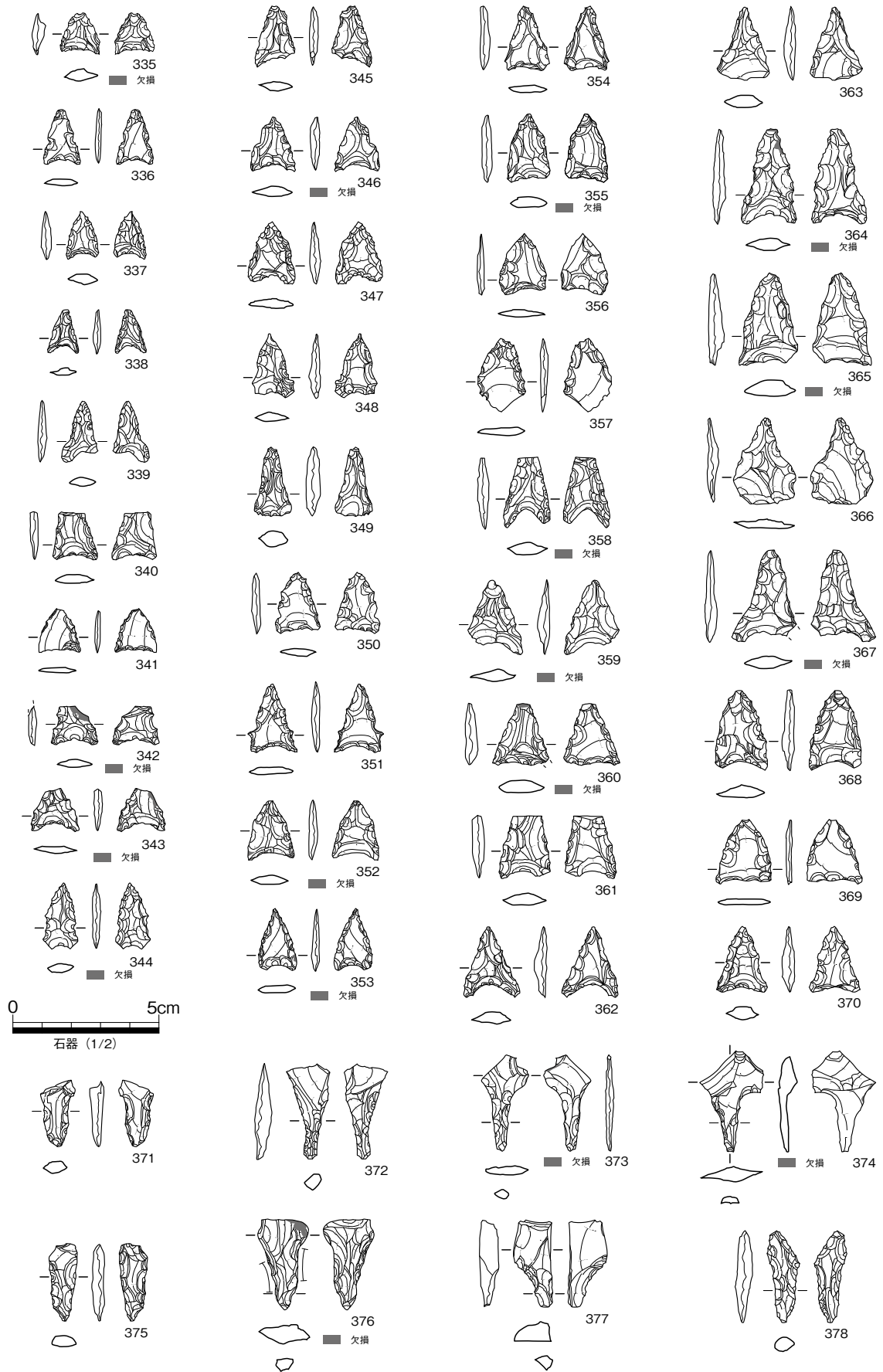
278は小型の弥生土器高杯であろう。279は小さな脚台状の底部と考えられる資料で器種は不明である。280～286は弥生土器蓋である。286は逆ボウル状で上部に穿孔が認められる。287～290は土製紡錘車である。287・289は円盤状に仕上げられ中央に孔を有する。288には貫通する孔がないものの、形状からみて紡錘車を意図した土製品の可能性がある。290は指による粗い整形に留まるが、中央に孔をもつため紡錘車とした。

291～296はサヌカイト製の打製石庖丁である。291は折損しているが直背弧刃形を指向するとみられる。B面右側縁の上方にわずかに自然面を残す。292は直背弧刃形の打製石庖丁である。上端部は研磨されている。293の上端部は摩耗している。295の抉りの下方両面に摩耗痕が認められる。296のA面下半部とB面の一部は研磨されている。

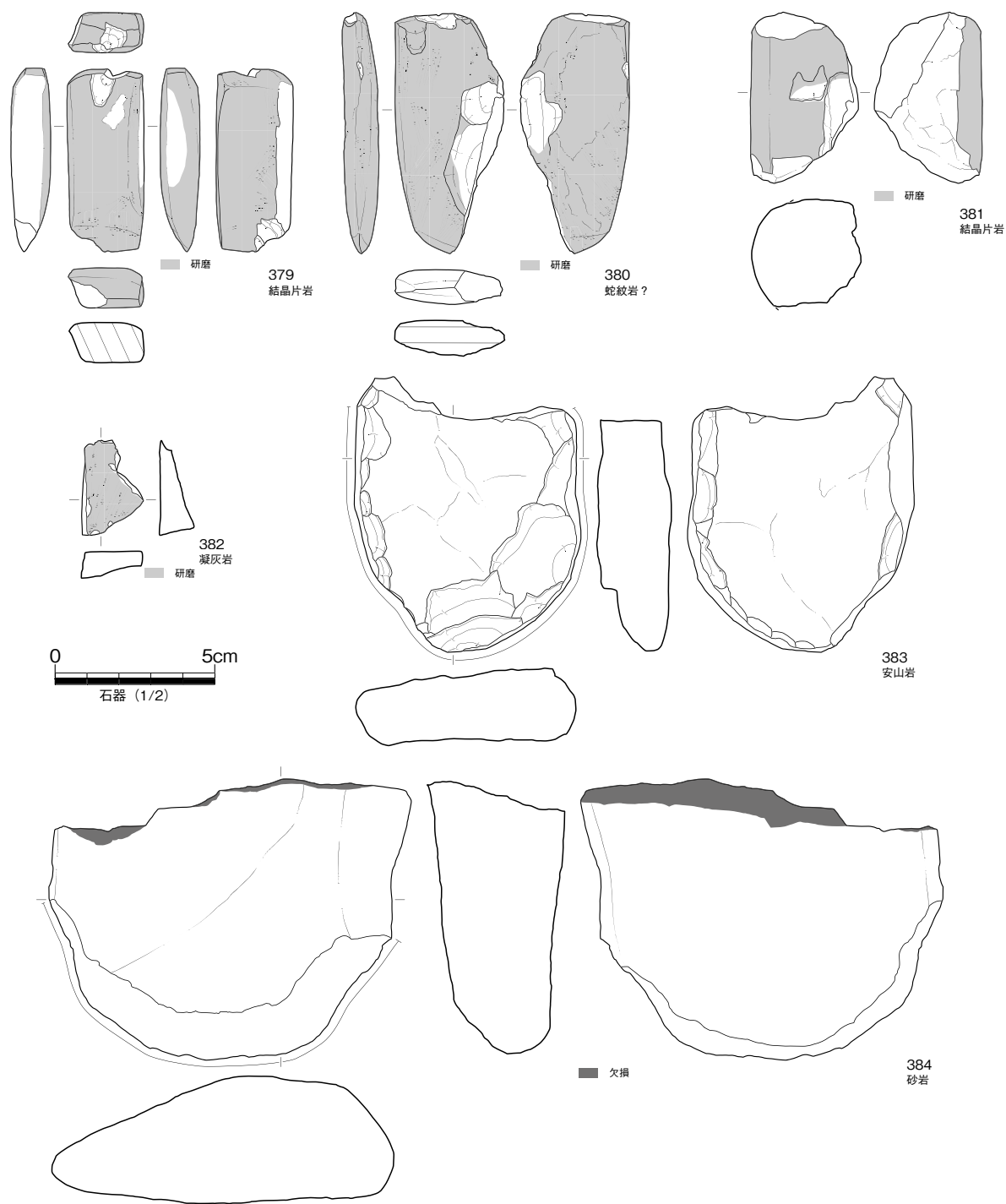
297～324はサヌカイト製のスクレイパーである。297の刃部には両面から細かな剥離が施されてい



第44図 SD24 出土遺物実測図 17



第 45 図 SD24 出土遺物実測図 18



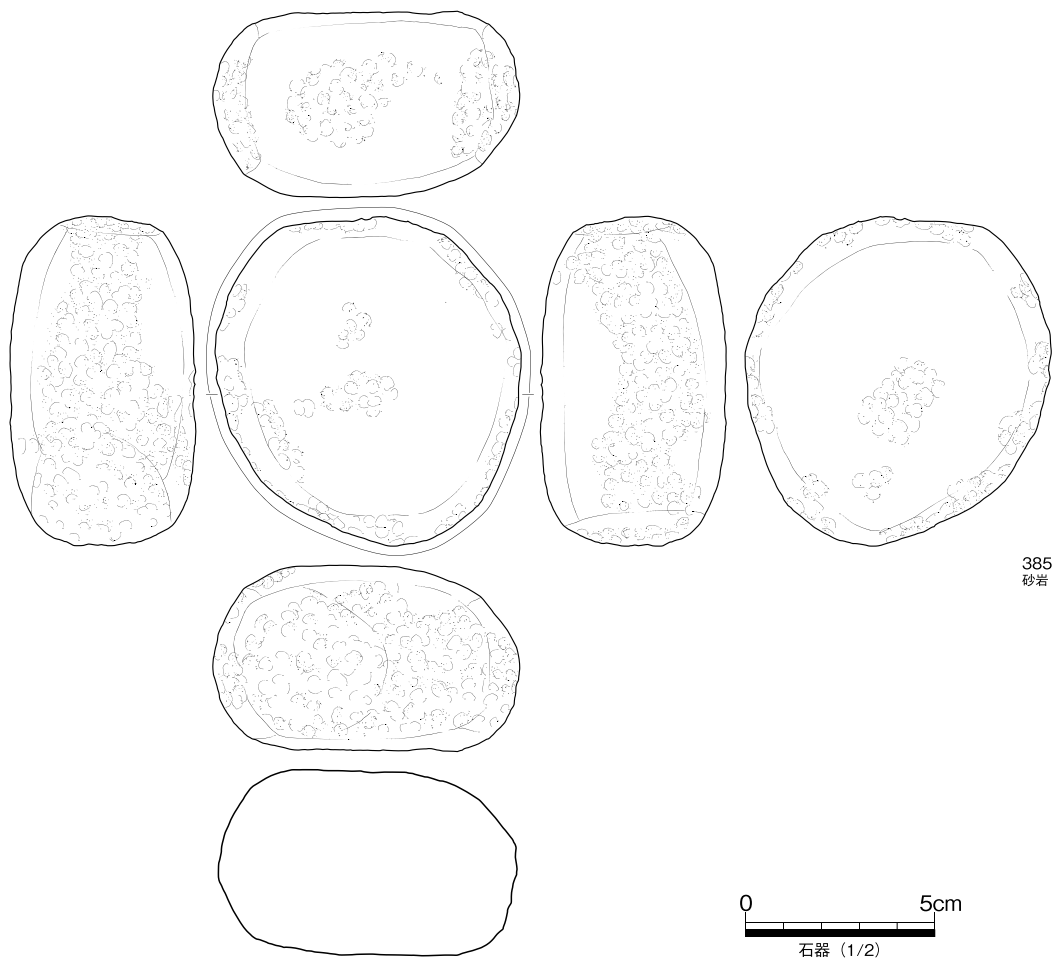
第46図 SD24 出土遺物実測図19

る。上端部には潰れ痕がある。298は上端の自然面を打面とする蓋然性が高い。299に用いられた剥片は上端部の自然面を打点とする。300はA・B両面から刃部調整が行われている。301は上端部に潰れ痕が認められる。304はA面に大きく自然面を残す。下端部にはB面から調整が施される。306は下端部に刃部を有する。A面左側縁近くの上下端部に抉りが形成されている。308は小サイズだが、下端部を刃部とみてスクレイパーと判断した。309は下端部B面から調整が施される。310は上部を欠損する。311～313は下端部に調整を確認できる。314は刃部に複数の細かな剥離面が認められるが、これらは使用痕の可能性もある。315は上下端部に調整が施される。318は下端部に両面から刃部調整が行われている。両側縁は折れている可能性がある。320に刃部調整は認められないが、下端部の微細な隔離を使用に伴うものとみた。321は下端部を刃部とするスクレイパーである。325は結晶片岩製のスクレイパーである。

326～344はサヌカイト製の加工痕のある剥片である。329は左端部を先端部とする打製石鏃未成品の可能性もある。

332～334は使用痕のある剥片である。いずれもサヌカイトを石材とする。

335～370はサヌカイト製の打製石鏃である。335～348・350～356・358～359・361・362・364・365・367・368・370は凹基式、349・360・369は平基式である。357は基部を欠損する。363・366については、形状から周縁部の調整が施される前の石鏃とした。



第47図 SD24 出土遺物実測図 20

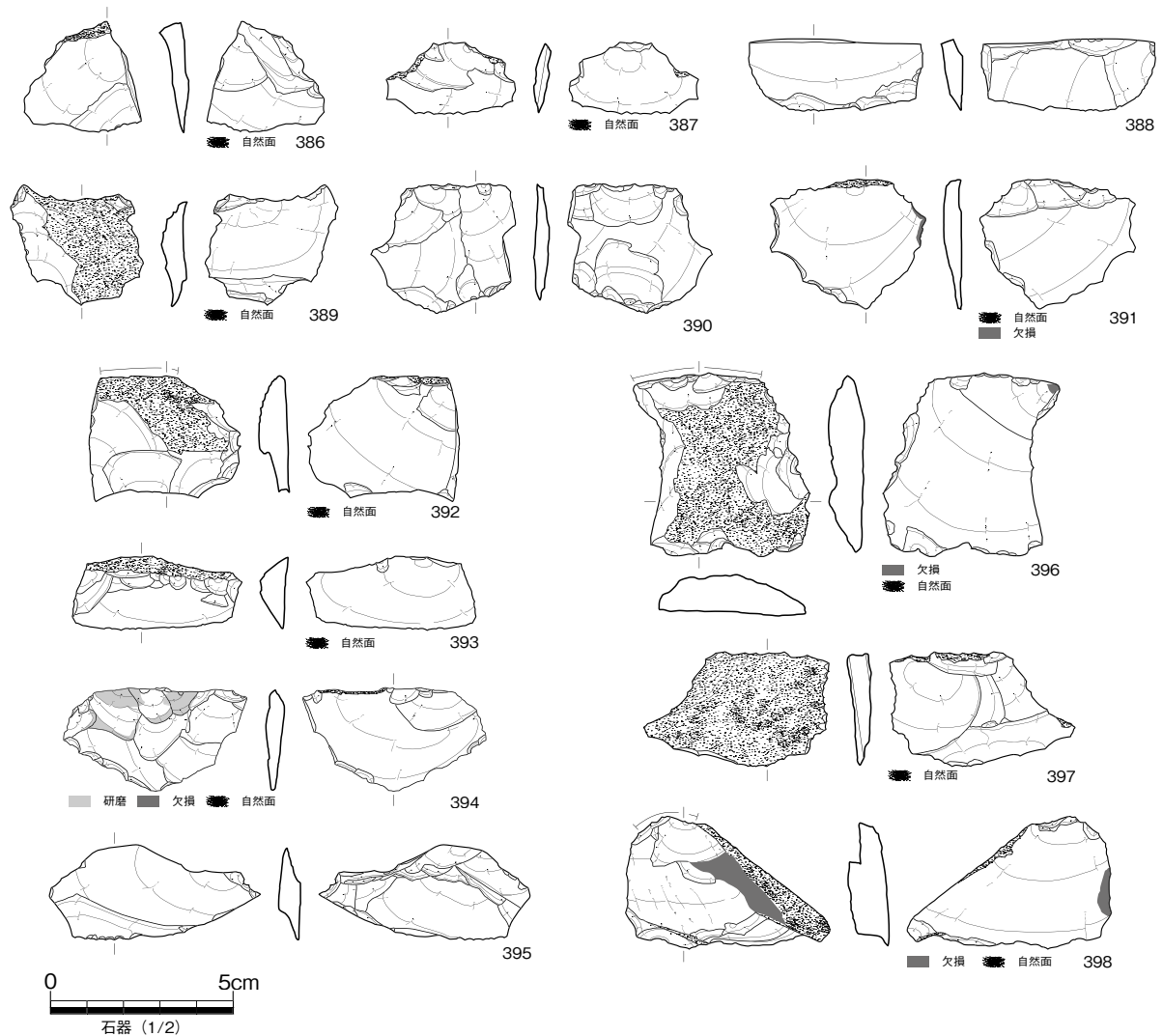
371～378はサヌカイト製の石錐である。374のB面は大きく剥離している。377はA面左下部にのみ調整が施されるが、形状から石錐とした。

379は結晶片岩製の扁平片刃石斧である。研磨が認められない右側面は破損とみられる。やや斜交するが、石理方向は刃部に直交する。380は扁平片刃石斧で一部を欠損し、残存する左側縁は平坦面をもつ。剥離面にも研磨が及んでいることから、剥離後も研磨されたとみられる。石理方向は刃部に平行する。石材は青灰色を呈し、蛇紋岩と推測される。

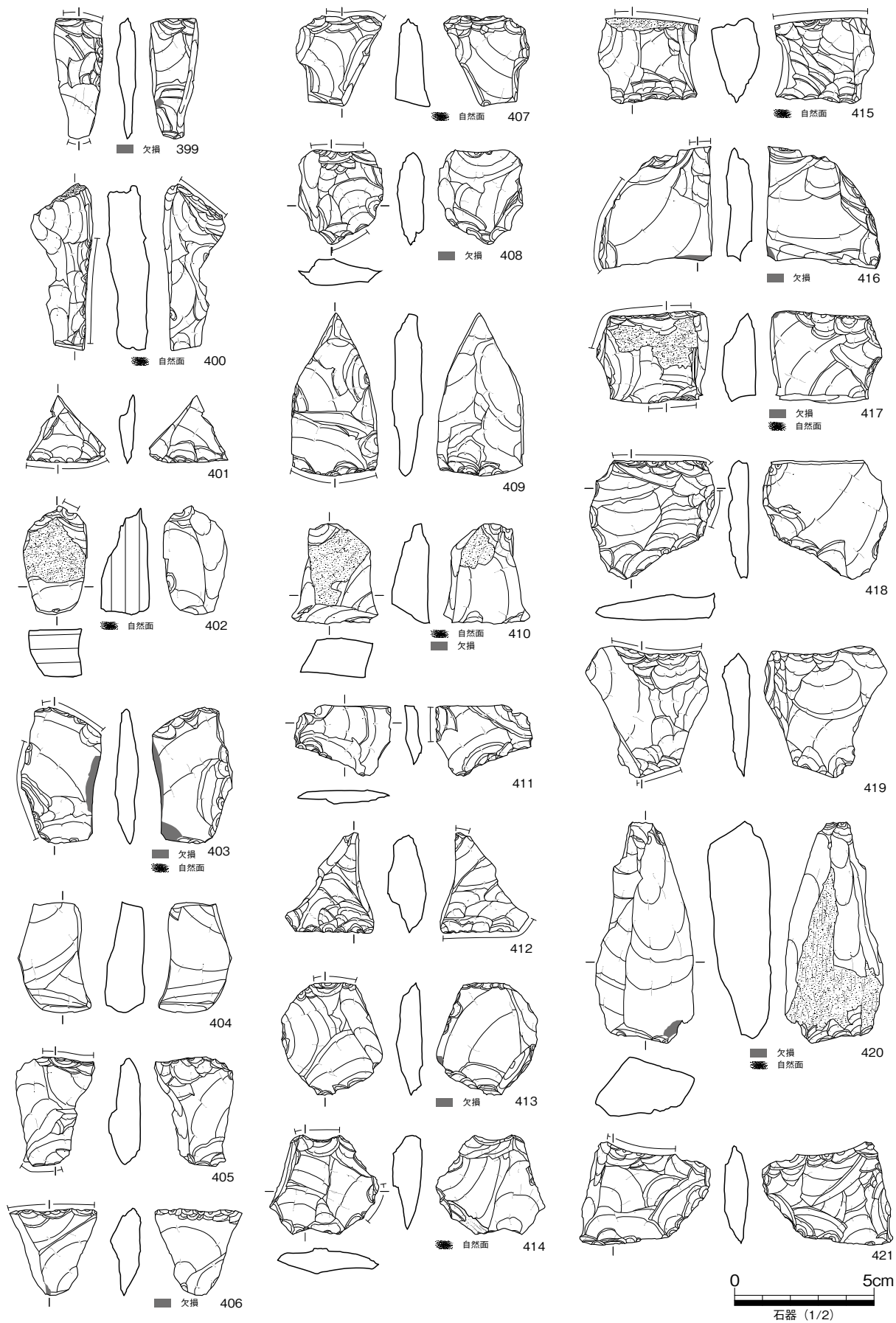
381は結晶片岩製の石棒で、研磨が及んでいない箇所は破損面と推測される。

382は凝灰岩製の砥石の破片とみられる。淡灰色を呈する。383は安山岩製の叩き石である。周縁部は敲打で潰れている。384については、下端部を人為的な敲打痕とみて砂岩製の叩き石とした。SD24埋土内に多量に含まれていた礫と同様の石材である。385は砂岩とみられる石材の叩き石で、周囲に叩打痕が残る。

386～398はサヌカイト製の剥片である。386・389・392・393は自然面を残す。394は上端部にわずかにある自然面を打面とする。B面の一部が研磨されている。396はA面に大きく自然面を残す。上端部に潰れ痕が認められる。397のA面はほぼ自然面である。398はA面上端部から右側縁部に自

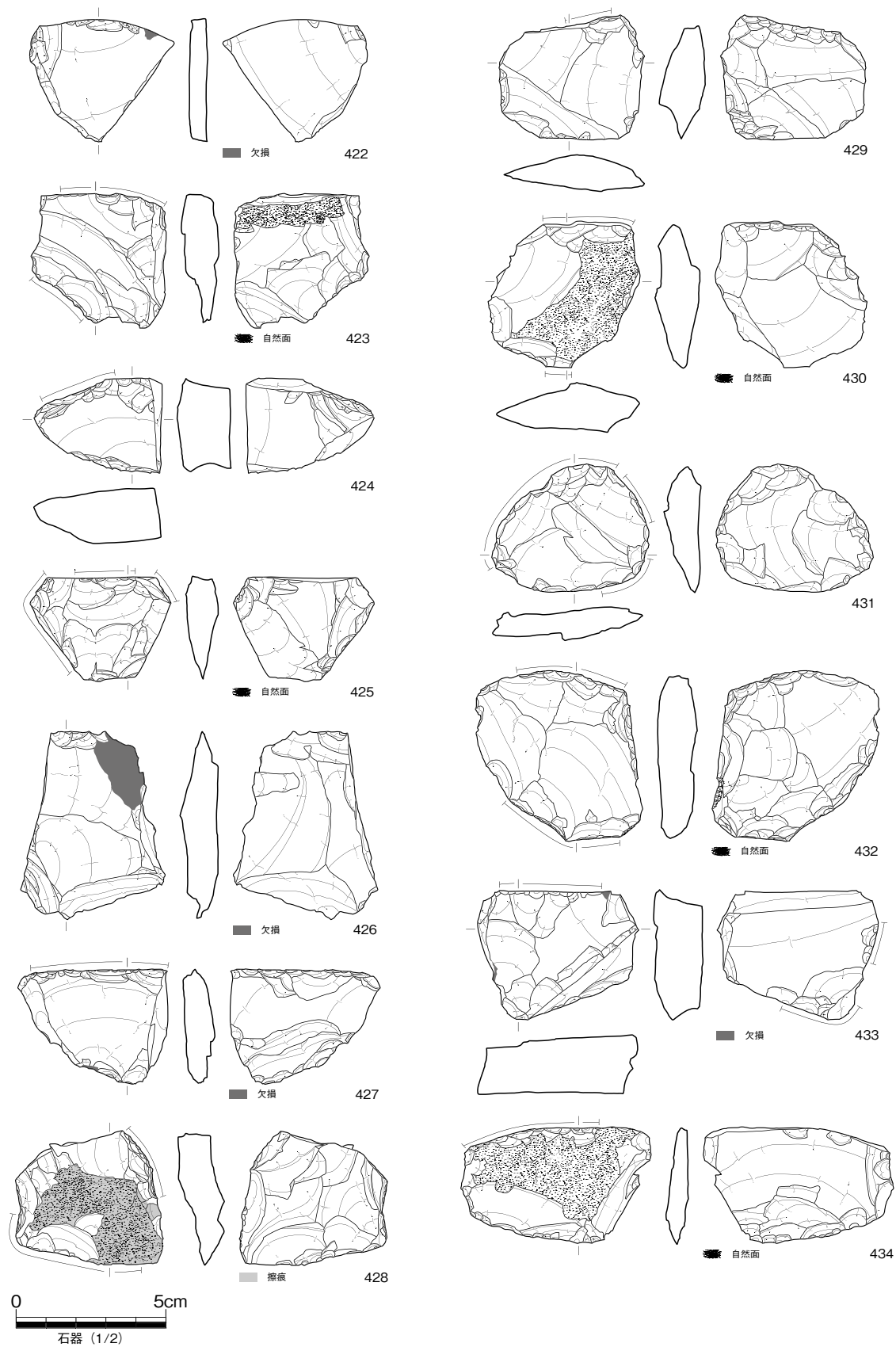


第48図 SD24 出土遺物実測図 21

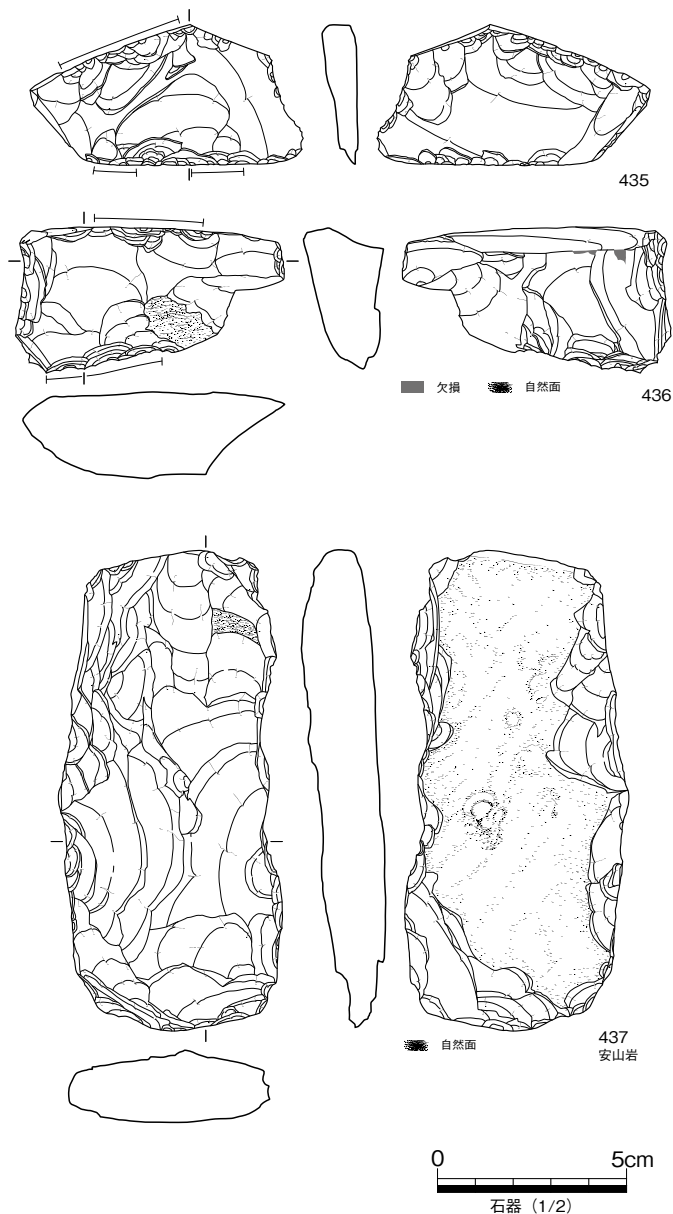


第 49 図 SD24 出土遺物実測図 22





第50図 SD24 出土遺物実測図 23

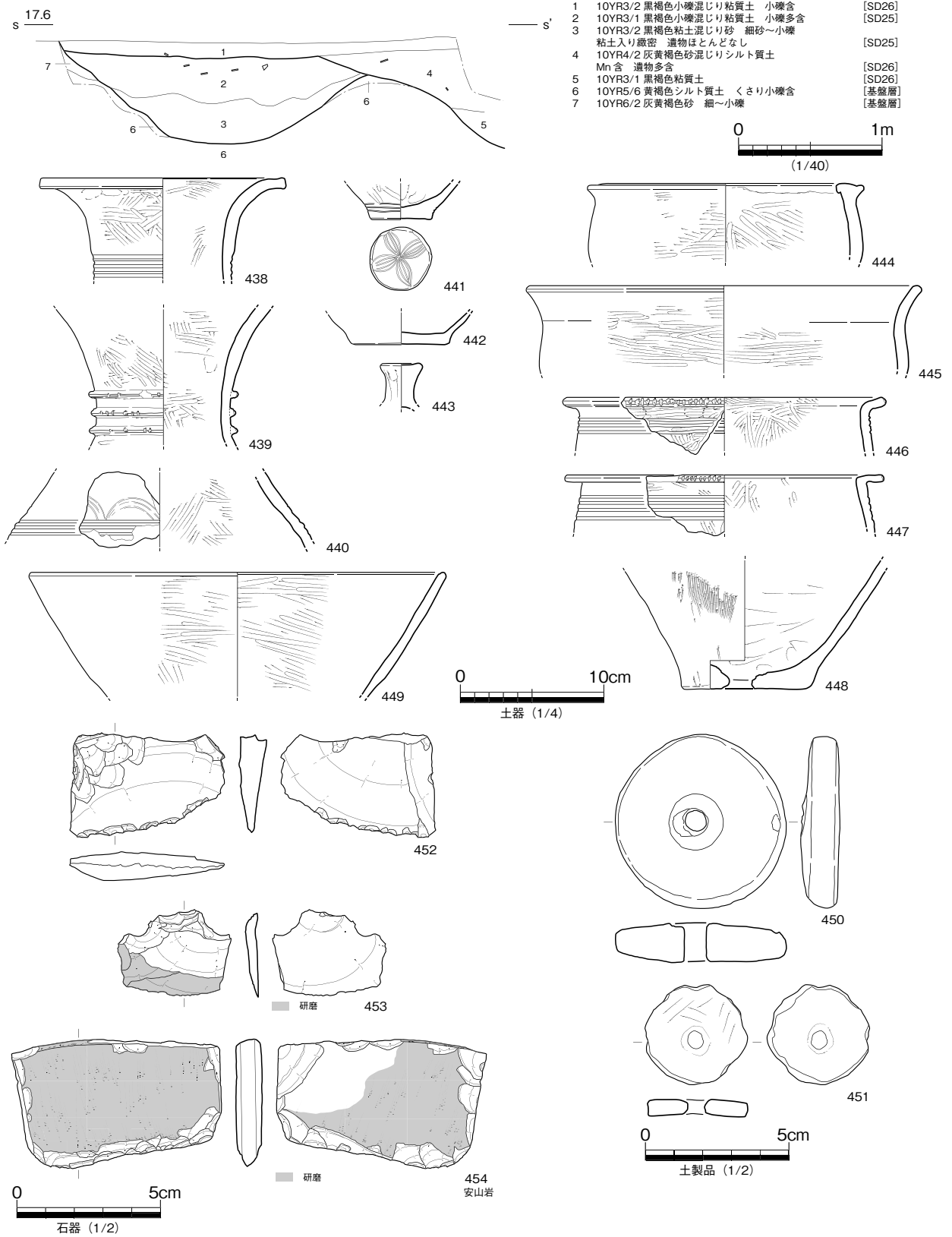


第 51 図 SD24 出土遺物実測図 24

然面があり、上端部には潰れ痕が確認される。

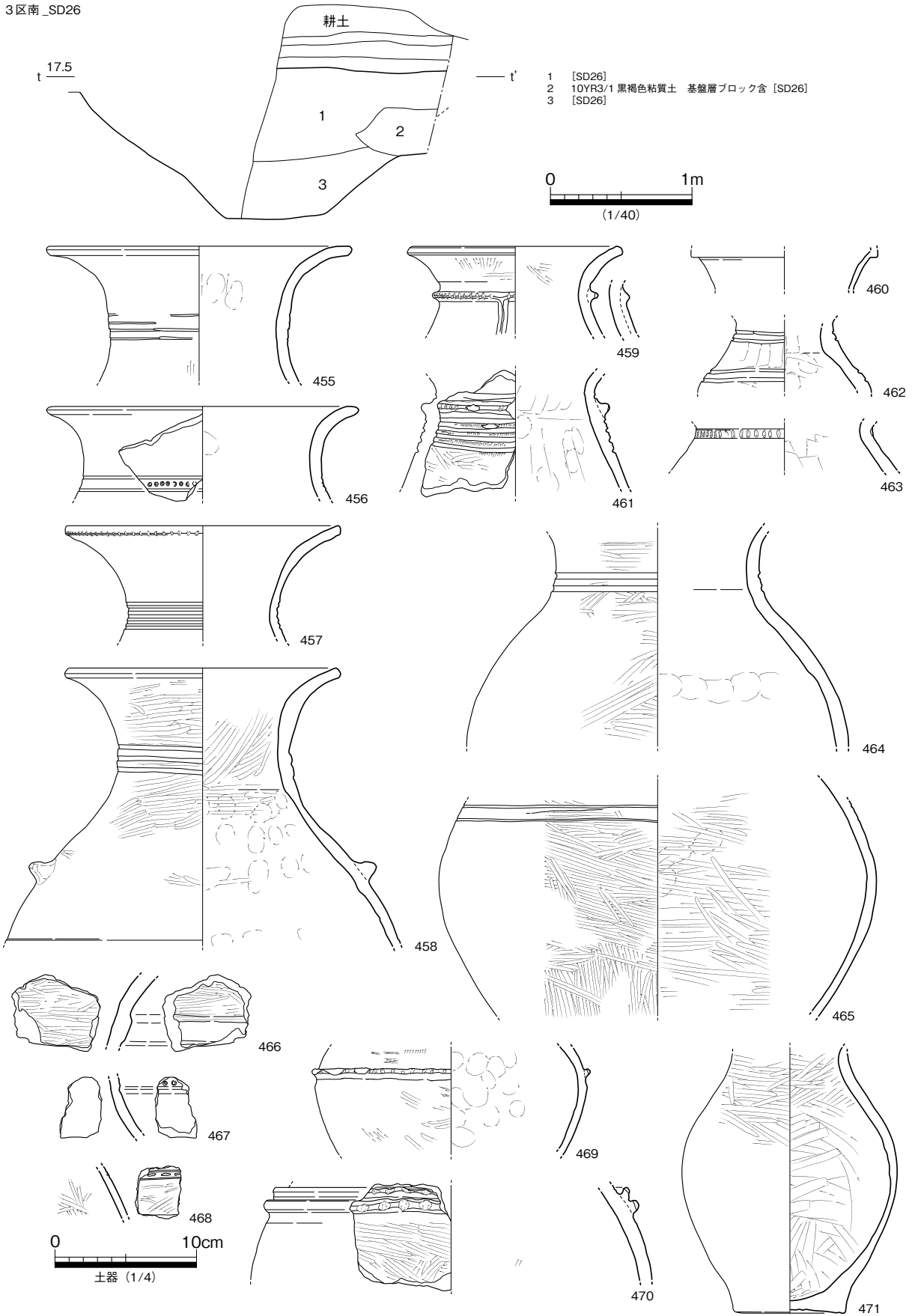
399～436はサヌカイト製の石核である。399・405・408・417・419・430・432・435・436は上下端部に潰れ痕が認められる。400は上端部の自然面に潰れ痕をもつ石核である。420は図の縦方向に数枚の剥離面が残る。428のA面の自然面には擦痕が確認できる。431は周縁部の3分の2程度に潰れ痕が認められる。石核437の石材は安山岩だろう。B面には剥離以前の風化面と推測される面が広く残る。

**時期** 出土した弥生土器には弥生時代前期前半～後半（前期Ⅰc期～Ⅱc期）の幅がある。埋没時期は最も新しい土器の前期後半（前期Ⅱc期）としたい。

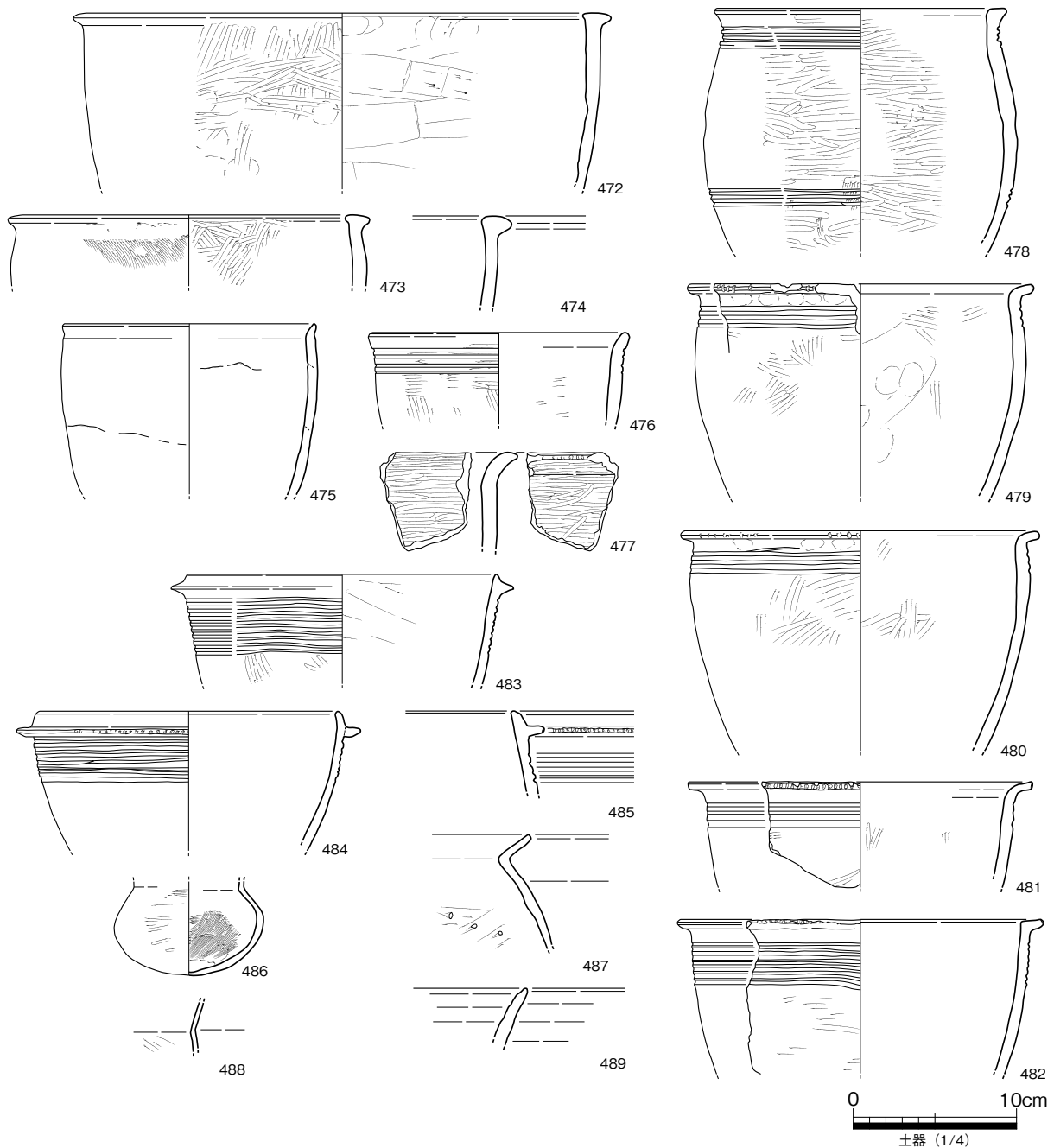


第52図 SD25 断面・出土遺物実測図

3区南\_SD26



第 53 図 SD26 断面・出土遺物実測図 1



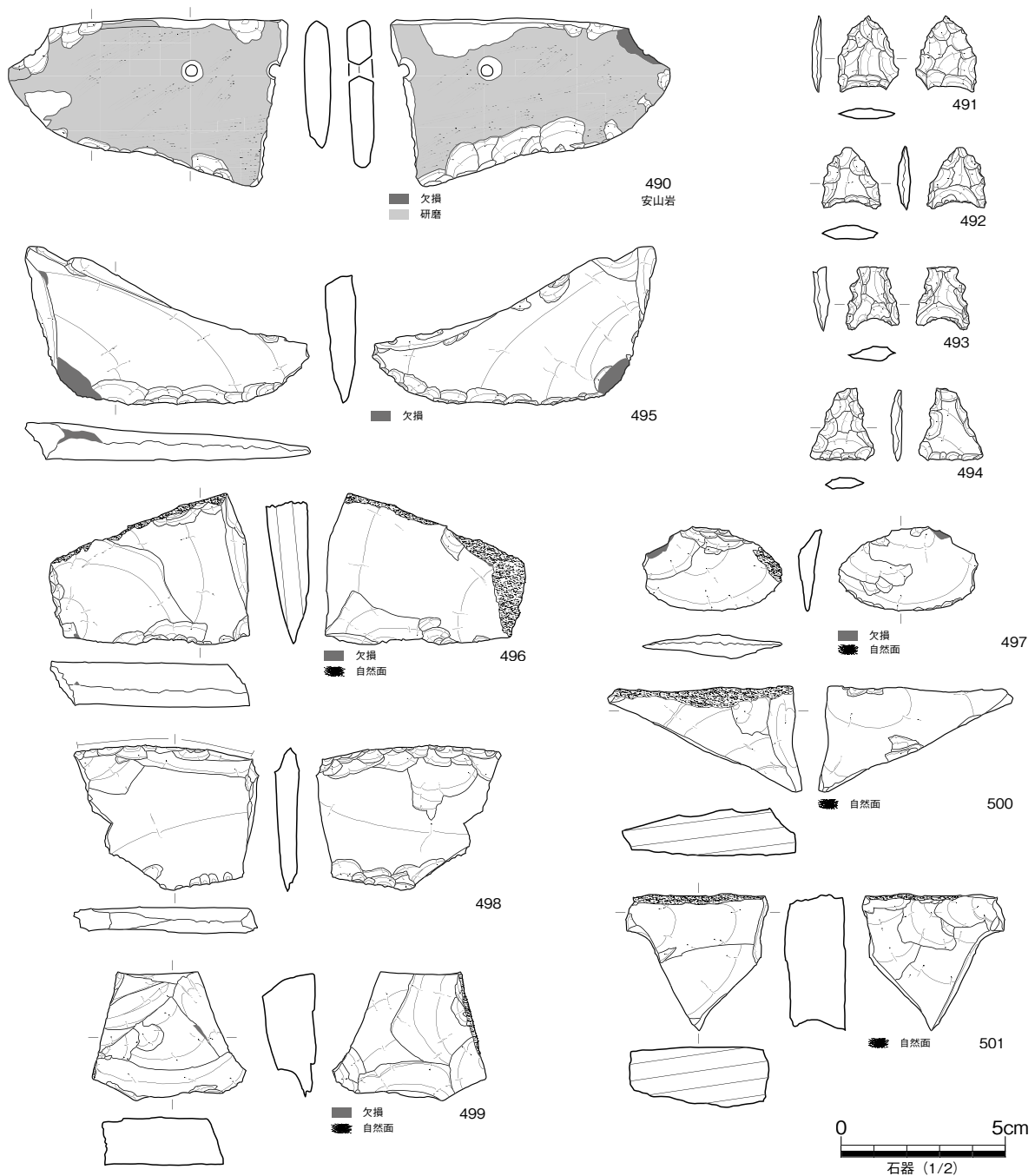
第54図 SD26 出土遺物実測図2

## SD25・26 (調査時遺構名：3区南SD25・26)

3区南の北端部で検出した溝である。SD25は南西から流下し、その先の流路はSR04またはSR03に破壊される。SD26はほぼ南北方向でSD25埋没後に形成されている。両溝ともに埋土や出土遺物からSD24とはほぼ同時期の溝と推測され、調査地外にあたる西方では一つの溝からSD24・25・26が分岐した可能性もある。第52図断面図の注記によれば、SD25は2層、SD26は4層から多くの遺物が出土したようである。

**SD25 出土遺物** 438～448は弥生土器である。壺438の口頸部境に施された沈線は4条よりも多い可能性がある。壺439の頸部には刻目をもつ貼り付け突帯が3条巡る。壺の破片440には頸部に3条

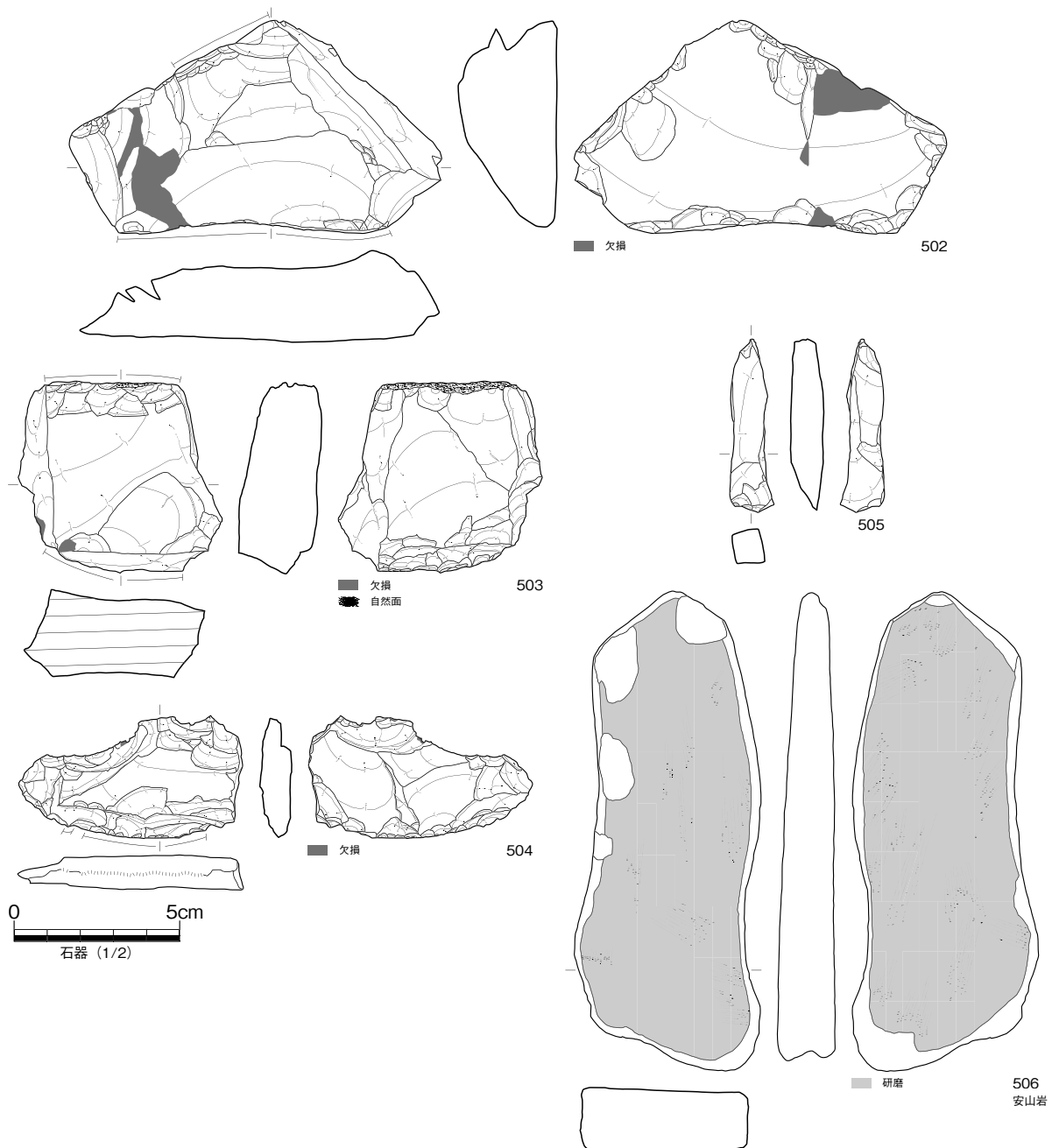
の弧状の文様が描かれる。壺 441 の底部外面に木の葉文が認められる。442 は細粒の角閃石を多量に含む。後期中葉～後半の香東川下流域産の壺底部である。取り上げ時の記録に「トレンチ」とある。甕 444 の口縁端部は拡張する。甕 445 は如意状口縁を有する。446・447 の頸胴部境には3条または4条の沈線が施される。甕底部 448 には外面からの穿孔が認められる。449 は鉢である。450 は紡錘車である。全体がナデで仕上げられる。451 は壺か甕の破片を転用した紡錘車である。452 は下端部に調整が行われているスクレイパーである。453 は剥片で、A面の下部に研磨が施される。安山岩製の砥石 454 のA・B両面の平坦面には基本的に上下方向の擦痕が残る。上端部と左右両側縁は裁断されているが、下端部には細かな剥離面が認められる。



第 55 図 SD26 出土遺物実測図 3

**SD26 出土遺物** 455～471は弥生土器壺である。456の口頸部境では沈線間に竹管文が並ぶ。458の胴部上半部には突起が貼付されている。459の頸部には刻目を有する貼り付け突帯が巡り、突帯から下方にも突帯が伸びる。460は器壁が薄く、胎土の含有物の粒径も大きくないため、前期ではない可能性がある。461の頸部に巡る貼り付け突帯は、上方1条、下方4条の沈線に挟まれる。463の頸部に施されているのは爪型文であろう。467の頸部に認められるのは竹管文、468についても、やや扁平だが竹管文だろう。472～485は弥生土器甕である。472～474・478は口縁端部を拡張する。475の口縁端部は若干外反する。482～484は頸胴部境に6～8条の沈線を有する。486～489は弥生時代終末期の土器で、取り上げ時の記録に「断面トレンチ」とある。

490は安山岩製の磨製石庖丁である。A面右側の孔から右は欠損している。刃部は摩耗によるためか、



第56図 SD26 出土遺物実測図4

やや丸みを帯びる。上端部は敲打による潰れが確認される。**491～494**はサヌカイト製打製石鏃である。**495**は下端部に細かな調整が施されるスクレイパーである。左側縁と上部は裁断されている。**496**は上端部から右側縁部にかけて自然面が残り、素材となる剥片が石理に沿って割られたことがわかる。下端部を刃部とみてスクレイパーとした。**497**はスクレイパーとした。A面下端部の剥離は刃部調整の可能性がある。**498**は下端部にB面から細かな調整が行われているスクレイパーである。上端部は潰されている。**499**は上端部と左右が裁断された石核である。**500**は下端部と右側縁が裁断された石核である。上端部には自然面が残る。**501**は上端に自然面を残し、左右両側縁が分割されている。石核であろう。**502**は石核である。下端部と上端の一部に潰れが認められる。**503**は、上下端部に線状痕が認められるため、両極打法による石核と推測される。上端部には自然面が残る。**504**は上端にステップが残る剥離面があり、下端部は潰れている。両極打法による石核としたが、元は下端部の細かな調整を刃部とするスクレイパーと考えられる。**505**は左右が裁断されて残った石核である。**506**は安山岩製の砥石である。板状の石材の広い両平坦面に研磨痕が認められる。

**時期** 出土した土器のほとんどは弥生時代前期に帰属し、弥生時代終末期の土器が少量認められる。弥生時代終末期の土器（**442・486～489**）は、取り上げ時の記録によれば、層位を無視してSD25・26の上位から掘り込まれたトレンチから出土した蓋然性が高い。よって、SD26は弥生時代前期の土器のうち最も新しい時期を示す前期後半（前期Ⅱb期）の埋没と考えられる。SD26に先行するSD25も弥生時代前期後半（前期Ⅱb期）としておく。

#### SR01（調査時遺構名：0区SR01A～C層・SR02、1区南SR01）

SR01は0区東半部で検出した自然河川である。南西から北東方向に流下し、途中で屈曲してから北西に方向を変える。1区南東部ではSR01の検出に失敗しているため、掘り下げは一部にとどまる。そのため、調査区壁の断面図や写真から範囲の把握を試みたが、発掘調査終了から時間が経過した現時点では推測の域を出ない。なお、位置関係や時期、堆積状況を踏まえると、SR01は鎌野西遺跡C2区のSD202・203に連続する蓋然性が高い。

以下、第57図で堆積状況について説明する。同地点の断面図と層位の解釈は、原図の記録、発掘調査の翌年度に刊行された『年報』（香川県埋蔵文化財センター編2005）の内容、発掘調査時に委託した自然科学分析（報告は第5章第2節参照）の3者で異なる箇所がある。この点は、発掘調査現場において分析受託者との間で層位解釈について調整がなされなかったことが原因とみられる。本報告では、図は原図を用いて、層の説明と解釈は主として「自然科学分析報告」（第5章第2節。以下、「分析報告」とする）を引用する。『年報』の内容は補足的に使用して記述を進める。原図と「分析報告」では色調が異なる注記があるが、現状では写真を見ても判断が困難なため、基本的には「分析報告」の記載に従う。原図と「分析報告」ではそれぞれで層位に番号が付与されており、両者を区別するため「分析報告」の層番号は○番号とする。Loc.1～6は試料採取地点を示す。

**基盤層（河道4）** ⑩層（43層）、⑪層（12・15・17・44層）、⑫層（5・6・8・9・10・11層）、⑬（7層）が対応する。⑩層は灰褐色を呈し、塊状をなす砂質粘質土シルト層である。層相から古土壌と判断される。⑪層は灰黄色を呈し、塊状をなす細礫混じり粗砂粒～極細粒砂である。層相から古土壌と判断される。⑫層は暗灰色～黒褐色を呈し塊状をなす砂質粘土質シルトである。層相から流路充填堆積物と判断される。





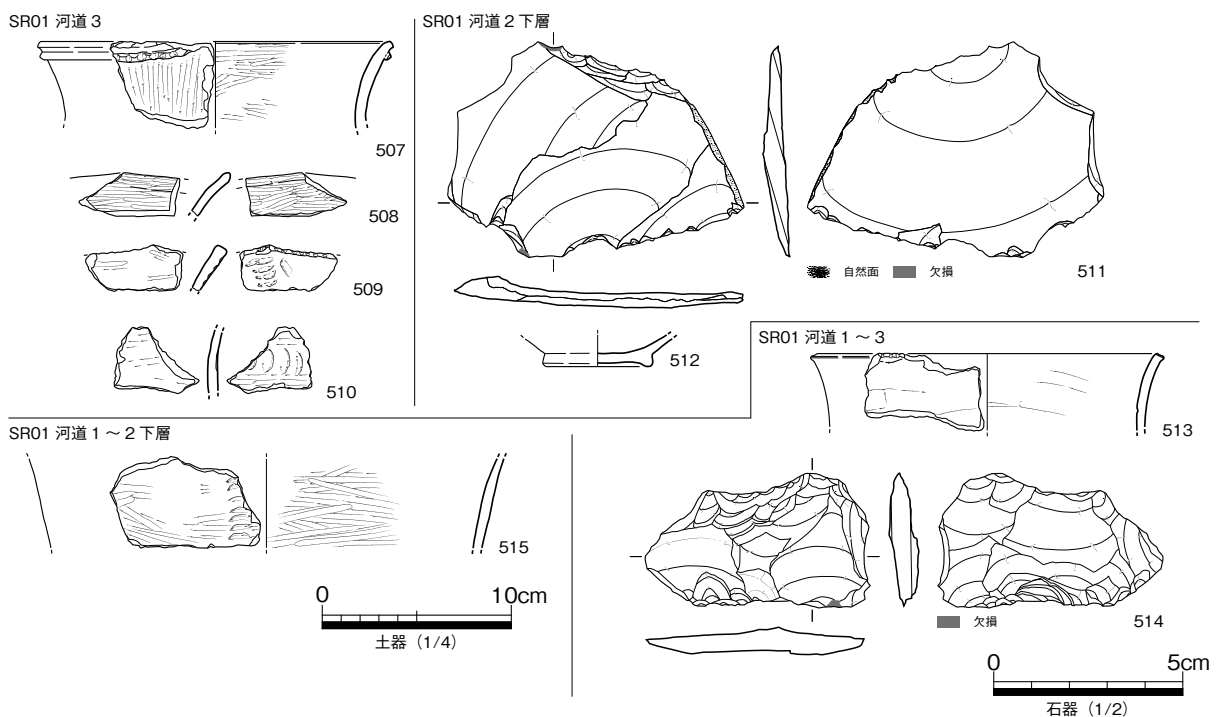
**SR01 河道 3** ⑨層（14・26・28～32・35層）が対応する。⑨層は灰白色を呈し、トラフ型斜交層理・葉理をなす極粗粒砂～細礫である。基盤層の⑩・⑫・⑬層を侵食して形成されている。層相から流路充填堆積物と判断される。ここから出土した杭の放射性炭素年代測定値は 3940 ± 130BP を示した。

**SR01 河道 2 下層** ⑦層（33・39層）、⑧層（21・24・25・34層）が対応する。⑦層は流路中心部では灰白色を呈し、トラフ型斜交層理・葉理をなす極粗粒砂～細礫が壘重する。西に向かって粒径を減ずる。滯筋付近を充填した堆積物と推定される。「分析報告」では滯筋よりも西側に広がるとするが、原図ではこれに対応する層を確認できない。⑧層は黒褐色を呈し、弱い水平葉理をなすシルト混じり粗粒砂～極粗粒砂である。堆積物中には有機物を多く含んでいる。層相から流路縁付近の静水域の堆積環境下で形成されたことが推定される。

**SR01 河道 2 上層** ⑤層（18・19・22・23・27・38・40・41・46層及び20層の一部）、⑥層（20層の一部）が対応する。流路中心部の Loc.3 では灰白色を呈しトラフ型斜交層理・葉理をなす極粗粒砂～細砂が壘重する。Loc.3 は、上位に壘重する③層によって上半部が大きく侵食されている。SR01 内の西半部では Loc.3 の砂礫層と同時異相をなす灰白色を呈し水平葉理ないし塊状をなすシルト混じり中粒砂～粗粒砂が分布している。以上のような⑤層内における層相の分布から、Loc.3 は流路の滯筋付近を充填した堆積物、Loc.4～6 は流路縁～河岸付近で堆積したことが推定される。

**SN01 作土層** ④層（2～4層）が対応する。褐灰色を呈し、塊状をなす砂質シルトである。本層上面で SN01 の水田畦畔が検出されている。軟 X 線写真による詳細な土壌及び堆積構造観察（第4章参照）の結果、本層は作土層の蓋然性が高くなった。

**SR01 河道 1** ③層（1・13・36・37・42・45層）が対応する。流路の中心部にあたる Loc.2・3 付近では、灰白色を呈しトラフ型斜交層理・葉理をなす極粗粒砂～細礫が壘重する。Loc.1・4～6 では、Loc.2・3 に堆積した砂礫層と同時異相をなす灰白色を呈し水平葉理ないし塊状をなすシルト混じり中粒砂～粗粒砂が壘重する。以上のような3層内における層相の分布から、Loc.2・3 は流路の滯筋付近を充填した



第 58 図 SR01 出土遺物実測図

堆積物と判断される。また、Loc.1・4～6は、洪水時に流路からオーバーフローして流路側縁や川岸に累重した堆積物であると推定される。本層からSK31が掘り込まれている。

基盤層を構成するのは人間活動以前の自然河川（河道4）である。河道4が埋没し、時間が経過した後、SR01が形成される。最下層の河道3は出土した土器から縄文時代晩期（突帯文Ⅱb期）の埋没と判断できる。なお、河道3出土杭による放射性炭素年代測定値は $3940 \pm 130\text{BP}$ と、土器の年代よりも古い値を示している。SN01の耕作土である④層は、河道2または河道3からオーバーフローした洪水堆積物によって形成された作土層である。④層及びSR01内の堆積ユニットの関係から、SN01機能時には河道2が流下していたことが推定される。河道1の氾濫堆積物によりSN01が埋没し、その上面から弥生時代前期前半（前期Ⅰc期）のSK31が形成される。よってSN01の形成時期は縄文時代晩期（突帯文Ⅱb期）～弥生時代前期前半（前期Ⅰc期）の間に絞り込まれる。

**SR01 河道3出土遺物** 縄文土器深鉢507は口縁部が大きく外反し、口縁端部からやや下がった位置に突帯をもつ。突帯には刻目が施される。508については波状口縁の縄文土器浅鉢として復元した。内外面のヘラミガキは密である。509・510は縄文土器深鉢で、いずれも外面に爪型文が認められる。

**SR01 河道2下層出土遺物** 511はサヌカイト製剥片である。A面右側縁に自然面を残す。512は縄文土器浅鉢の底部である。

**SR0 河道1～3出土遺物** 513は縄文土器深鉢として復元した。514は下端部を刃部とみてスクレイパーとした。

**SR01 河道1～2下層出土遺物** 縄文土器深鉢515には、爪型文が縦に連続して施される。この他、図化していないが砂岩製の砥石が出土している。

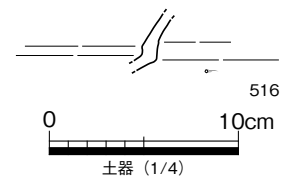
**時期** 507の口縁部が大きく外反するため、SR01河道3は縄文時代晩期（突帯文Ⅱb期）に位置づけられる。河道1・2は、SK31に先行することから縄文時代晩期（突帯文Ⅱb期）から弥生時代前期前半（前期Ⅰc期）の間に埋没したと考えられる。

### SR02（調査時遺構名：1区南SR02）

全体を検出できていないため、平面形は断面図から推測した。後期の弥生土器高杯が1点出土していることから、最終的には後期の埋没と推測されるが、SR01から分岐するのであれば、その下層は縄文時代晩期（突帯文Ⅱb期）～弥生時代前期前半（前期Ⅰc期）に位置づけられることになる。ただし、SR01との関係や、時期を追及するための調査が行われていないため、SR01との前後関係や時期を判断する材料は得られていない。

**出土遺物** 516は弥生土器高杯である。

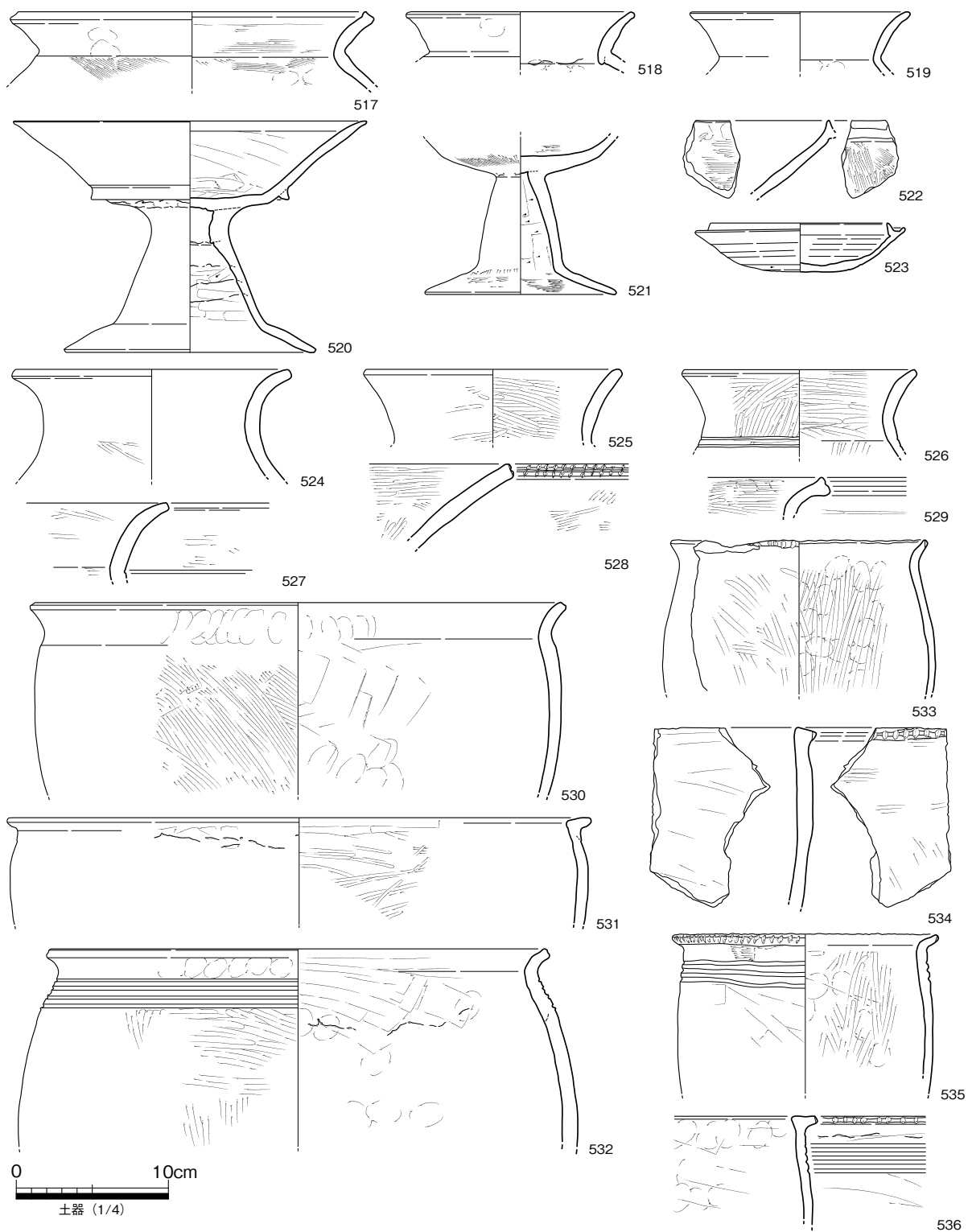
**時期** 516から弥生時代後期後半の埋没としておく。



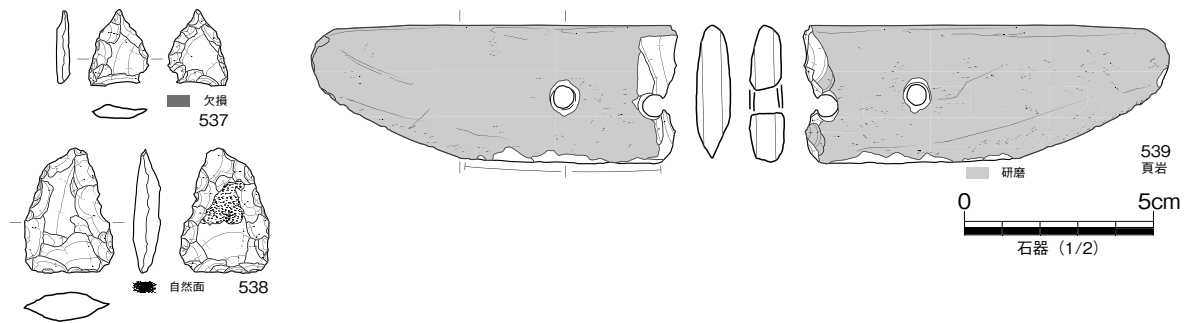
第59図 SR02出土遺物実測図

### SR03・04、SD19（調査時遺構名：2区西・3区南SR03・04、2区西・3区南SD19）

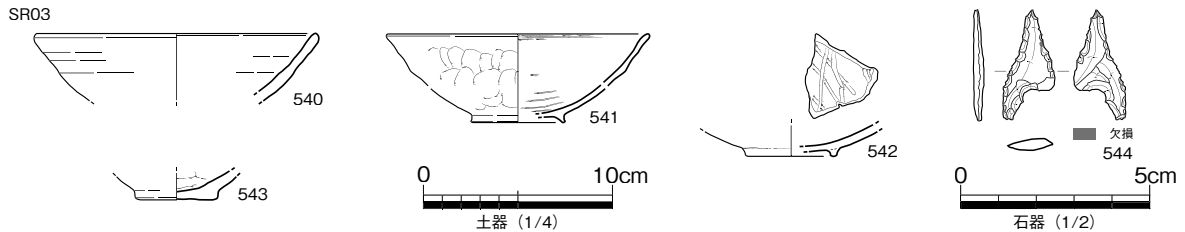
SR04は、調査地外から2区西にかけて東流し、調査地内で屈曲して北西に延びる。西側の肩部から底部にかけて黒色粘質土（第26図14層）が堆積し、5・12・13層から上位は、より粗粒の堆積層になる。14層は人力で掘削したが、それ以外の層は遺物の包含が僅少であること、粗粒堆積物による掘削法面



第60図 SR04 出土遺物実測図1



第61図 SR04 出土遺物実測図2



第62図 SR03 出土遺物実測図

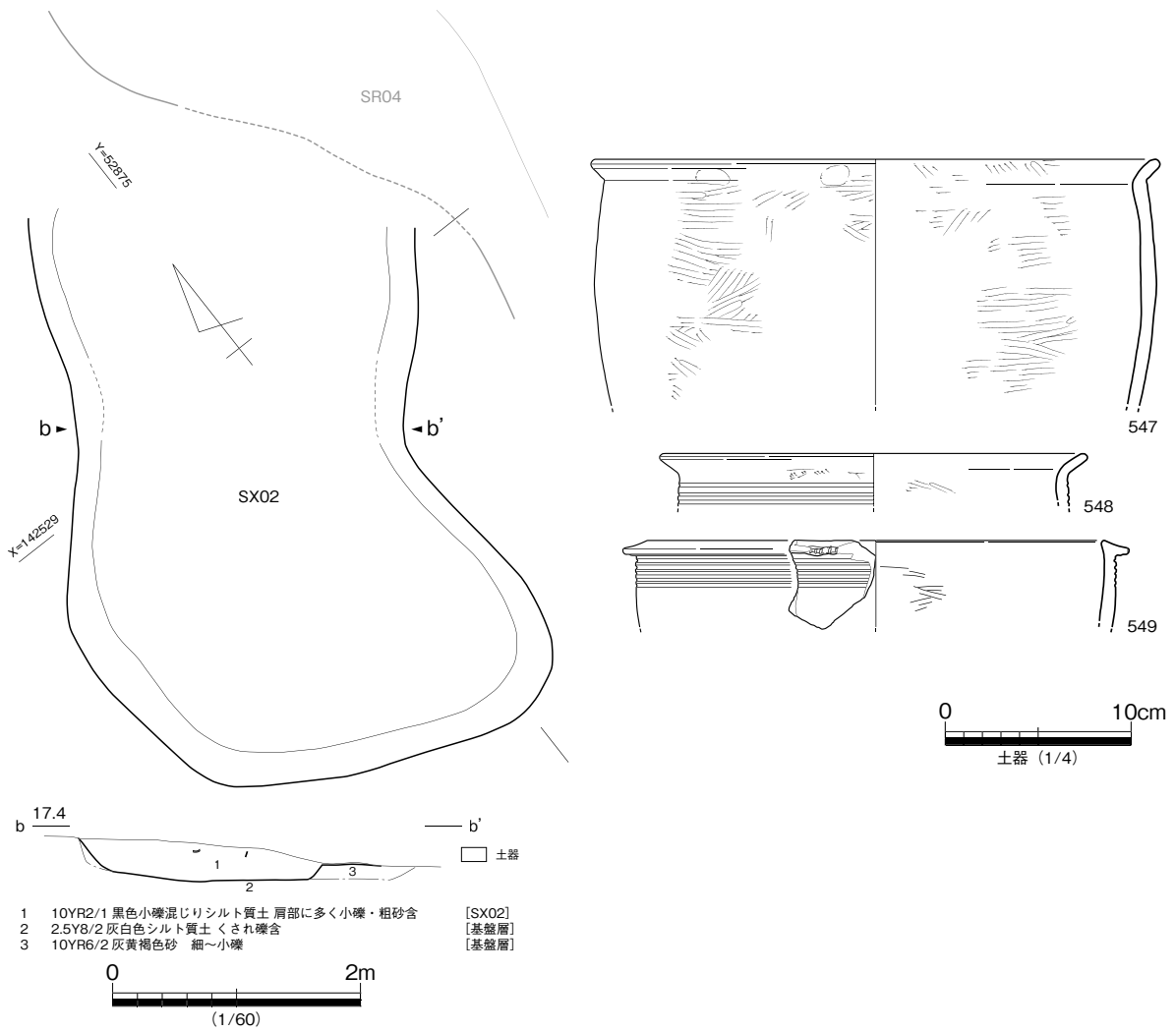
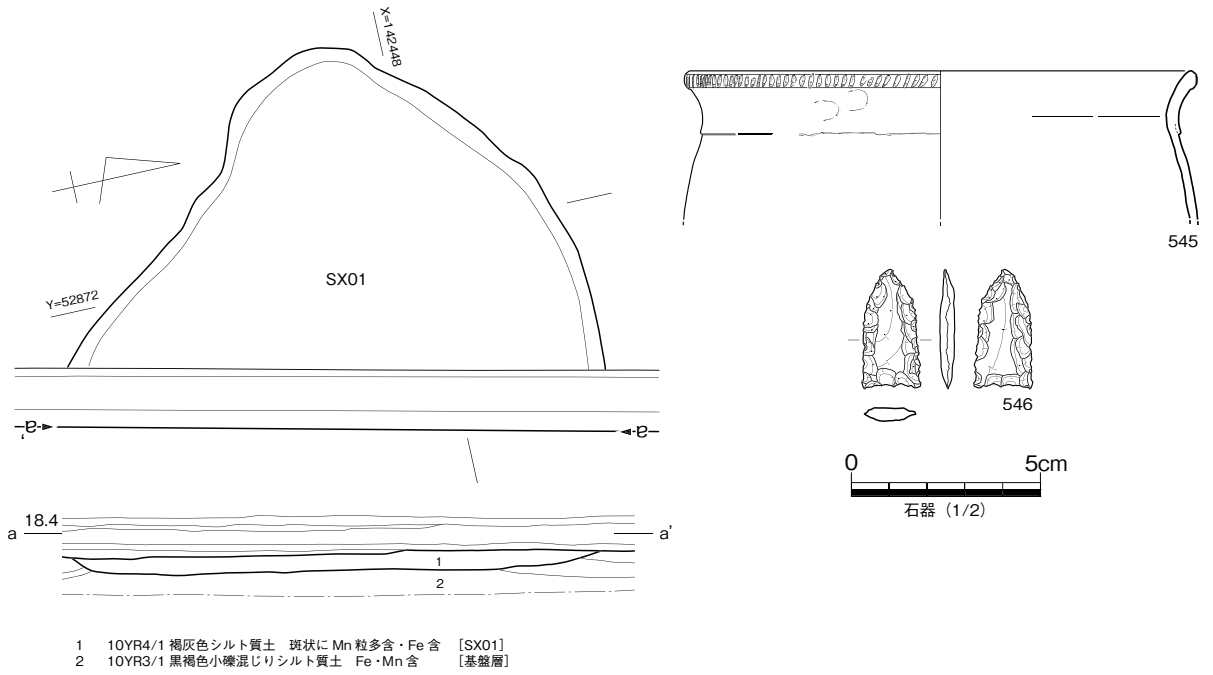
崩壊の危険性を考慮して、調査は数本のトレンチによる一部の掘り下げにとどめた。

SR04 埋没後、18層の灰色粘土層を基盤層とする窪地がSR03である。SR03の幅は約4.0m、深さは約0.1mである。3区北ではSR03東部の下面(18層上面)で人間と偶蹄目の足跡を検出した。調査時にはSR03が水田であった可能性を考えている。また、SR03の東岸に沿って、幅約0.9m、深さ約0.2mの溝SD19が形成されている。SD03との間に高さ約50cmの畦が設けられ、畦頂部はSD19左岸よりも5cm程度低い。よってSD19から畦越しにSR03へ灌水していたと考えられる。

**SR04 出土遺物** 取り上げ時の記録から520は第26図14層出土、523・534は5・12・13層より上位層出土の可能性がある。他は出土層位不明である。517～519は土師器甕、520・521は土師器高杯である。520は杯部屈曲部のやや上位に断面三角形の突帯が巡る。522は器種不明の土師器とした。端部がやや拡張する。523は須恵器杯である。524～529は弥生土器壺、530～536は弥生土器甕である。537・538は打製石鏃である。538は先端部を欠損し、B面中央部に自然面が残る。539は頁岩製の磨製石庖丁で、右側の孔の位置で縦に割れている。直背弧刃形だが、刃部の中央部は潰されており、背部が角度をもつように研磨されていることから、最終的には刃部と背部を入れ替えて、上端部を刃部とした可能性も否定できない。

**SR03 出土遺物** 540は十瓶山窯系須恵器椀、541・542は瓦器椀である。543は杯か。544はサヌカイト製打製石鏃である。

**時期** SR04の西岸寄り底部直上に堆積する14層は520から古墳時代前期前半(古墳前期2～3期)に位置づけられる。5・12・13層より上位の層については、もっとも新しい時期を示す須恵器杯523から6世紀後葉(TK43型式並行期)埋没とする。なお、前期の弥生土器(524～536)も一定量出土していることから、弥生時代前期にも流路が存在していた可能性がある。石器537～539は弥生時代前期のものであろう。SR04埋没後に形成されているSR03は541から11世紀後半～12世紀前半とみられる。SR03に関連するSD19も同時期と考えられる。



第 63 図 SX01・02 平・断面・遺物実測図

**SX01（調査時遺構名：1区南 SX01）**

1区南で検出した深さ0.2m程度の落ち込み状の遺構である。平面形は不定形で、断面は浅い皿状を呈する。

**遺物** 545は弥生土器甕、546はサヌカイト製打製石鏃である。

**時期** 545から弥生時代前期前半（前期I c期）と判断できる。

**SX02（調査時遺構名：2区西 SX02）**

2区西で検出した落ち込み状の遺構で、一部は後出するSR04に破壊されている。SD24・25・26と同様の溝の底部の一部が残存した遺構の可能性もある。

**遺物** 547～549は弥生土器甕である。

**時期** 549を根拠とすれば、弥生時代前期後半（前期II b期）の埋没となる。

**SR05**

2区東で検出した自然流路で、平面のみの検出に留まっている。南西側の落ち込みは1区北・1区南の東壁の断面（第13図）で確認できるが、北東側の落ち込みは断面で確認できない。北東側の上端の位置によってはSR05の幅が広がる可能性もある。後述するように弥生時代前期前半以前の遺構であるため、SR04の古い流路とSR01の間をつなぐ遺構の可能性もある。

**時期** SD07に先行するため、弥生時代前期前半（前期I c期）以前となる。

## 2 第1遺構検出面の遺構と遺物（近世）

**掘立柱建物****SB01（調査時遺構名：1区南 SB01）**

1区南で検出した掘立柱建物で、桁行2間（4.6m）、梁行1間（3.0m）、床面積は13.8㎡である。

**時期** 埋土と主軸、周辺遺構との関係から近世と判断できる。

**SB02（調査時遺構名：1区南 SB02）**

1区南で検出した掘立柱建物で、桁行4間（8.6m）、梁行1間（3.9～4.0m）、床面積は34.0㎡である。

**時期** 埋土と主軸、周辺遺構との関係から近世と判断できる。

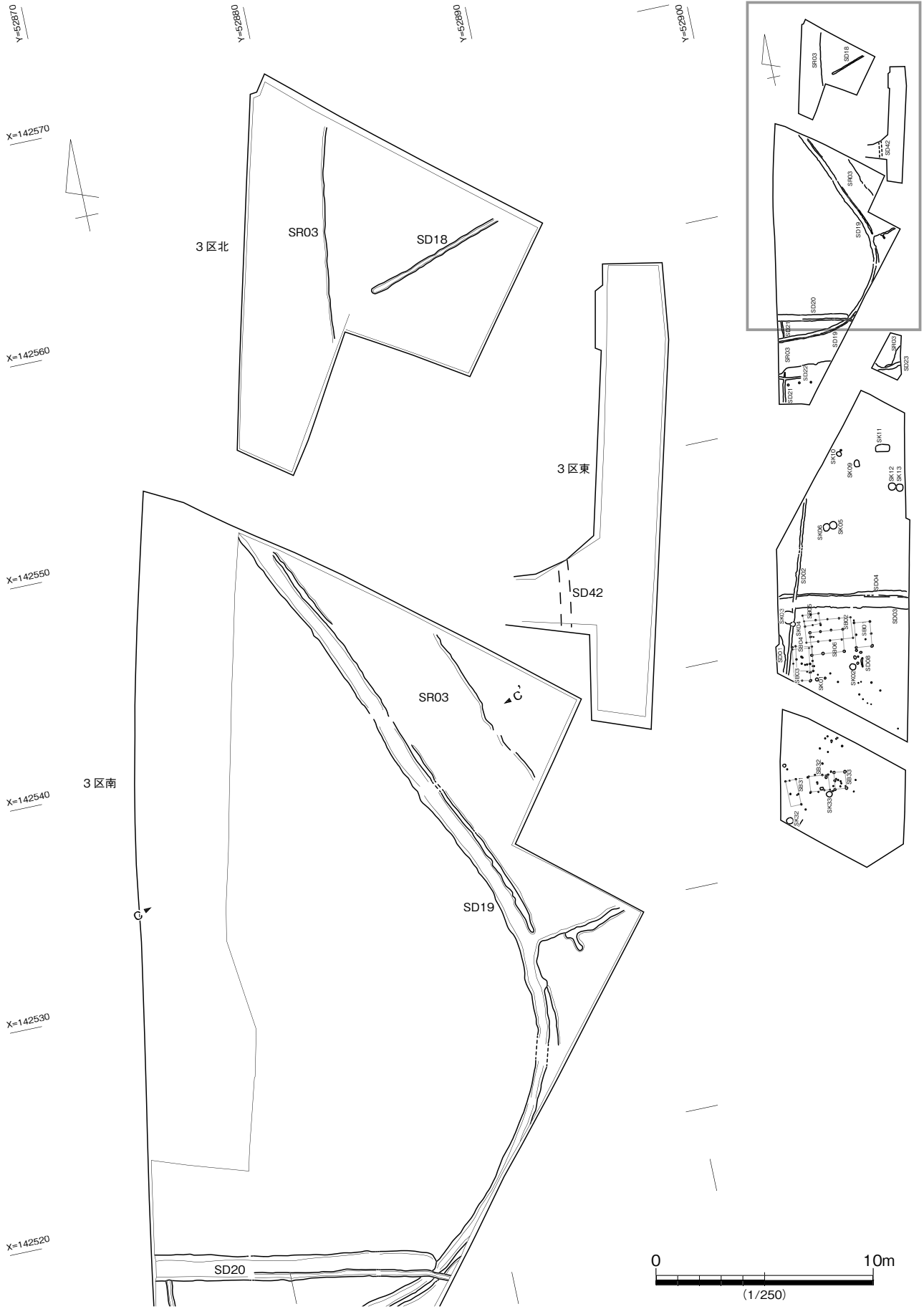
**SB03（調査時遺構名：1区南 SB03）**

1区南で検出した掘立柱建物で、南西の2柱穴が検出されていないが、桁行2間（5.9～6.1m）、梁行2間（2.9～3.1m）の構造とみられる。面積は18㎡である。中央に東柱と推測される柱穴を有する。

**時期** 埋土と主軸、周辺遺構との関係から近世と判断できる。

**SB04（調査時遺構名：1区南 SB04）**

1区南で検出した掘立柱建物である。東辺で検出された柱穴は3基だが、西辺には5基の柱穴が並ぶ



第64図 第1遺構検出面遺構配置図1





第65図 第1遺構検出面遺構配置図2



第66図 第1遺構検出面遺構配置図3

ため桁行は4間(4.5～4.6m)とみられる。梁行は1間(3.0～3.1m)で、面積は13.7㎡である。

**時期** 埋土と主軸、周辺遺構との関係から近世と判断できる。

#### SB05 (調査時遺構名：1区南 SB05)

1区南で検出した掘立柱建物で、桁行2間(2.9～3.0m)、梁行1間(2.0m)、面積は5.9㎡である。

**時期** 埋土と主軸、周辺遺構との関係から近世と判断できる。

#### SB06 (調査時遺構名：1区南 SB06)

1区南で検出した掘立柱建物で、桁行3間(6.0～6.2m)、梁行1間(4.1～4.2m)、面積は24.7㎡である。未検出だが、南辺のSP01・03間にも柱穴が存在したと考えられる。

**時期** 埋土と主軸、周辺遺構との関係から近世と判断できる。

#### SB31 (調査時遺構名：0区 SB01)

0区で検出したL字状に並ぶ柱穴群で、東辺と南辺を復元して掘立柱建物とした。この場合、桁行2間(4.8m)、梁行2間(2.0m)、面積は9.6㎡となる。

**時期** 埋土と主軸から近世の蓋然性が高い。

#### SB32 (調査時遺構名：0区 SB02)

0区で検出した掘立柱建物である。桁行3間(3.5～3.6m)、梁行1間(2.8～2.9m)、面積は10.1㎡である。

**時期** 埋土と主軸から近世の蓋然性が高い。

#### SB33 (調査時遺構名：0区 SB03)

0区で検出した掘立柱建物である。2間(3.1m)×1間(2.1m)で面積は6.5㎡であるP05がSB33に関連する柱穴であれば、他の4基に比べて浅いため、東柱であろう。

**時期** 埋土と主軸から近世の蓋然性が高い。

#### SK01 (調査時遺構名：1区南 SK01)

平面形が0.6×0.5mの円形で、検出面からの深さ0.4mの土坑である。埋土の注記はないが、写真によれば褐灰色のシルトに近い土質であることがわかる。遺物は出土していない。

**時期** 埋土から近世の遺構と判断できる。

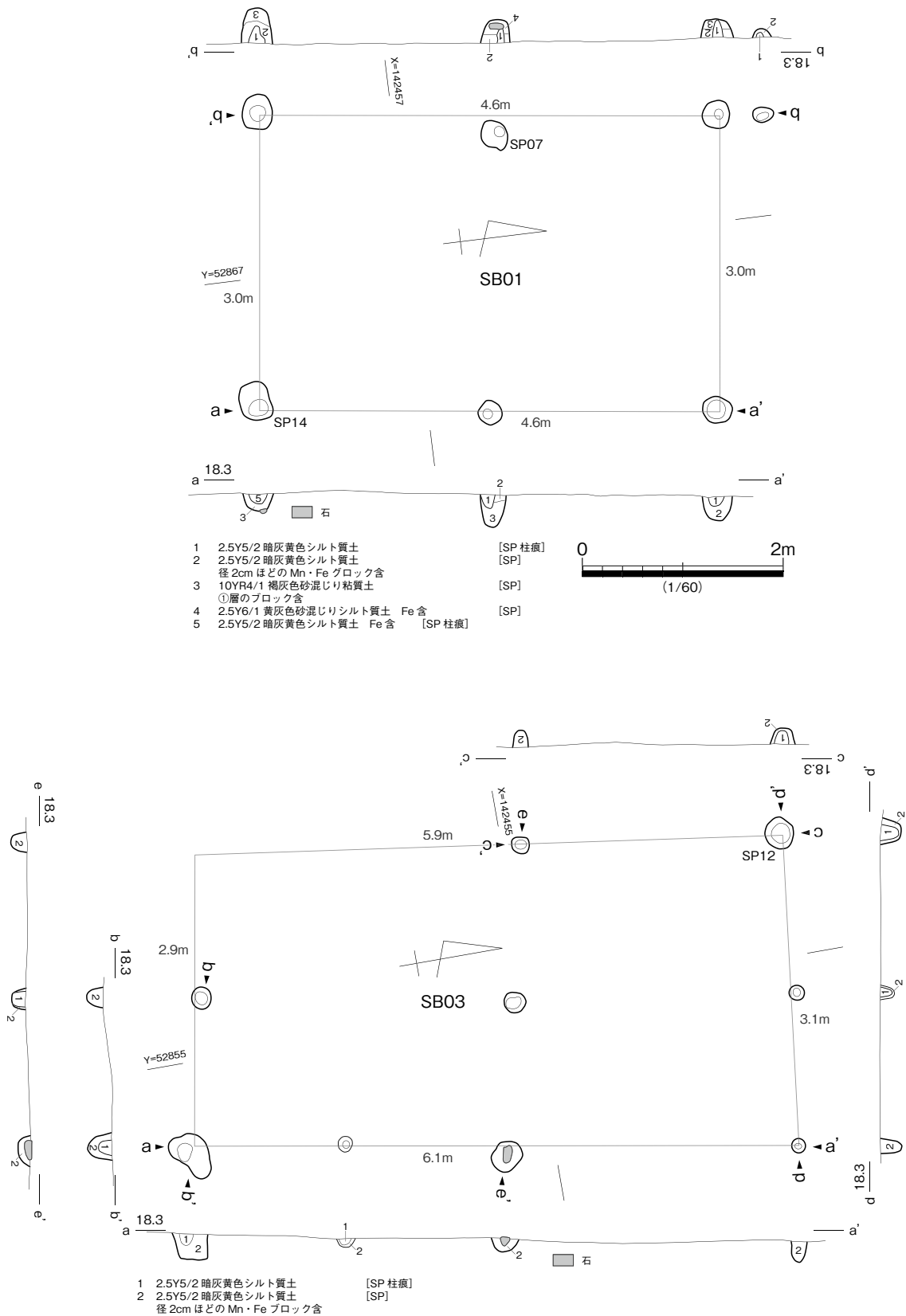
#### SK02 (調査時遺構名：1区南 SK02)

平面形が1.2×1.1mの円形で、検出面からの深さ0.4mの土坑である。遺物は出土していない。

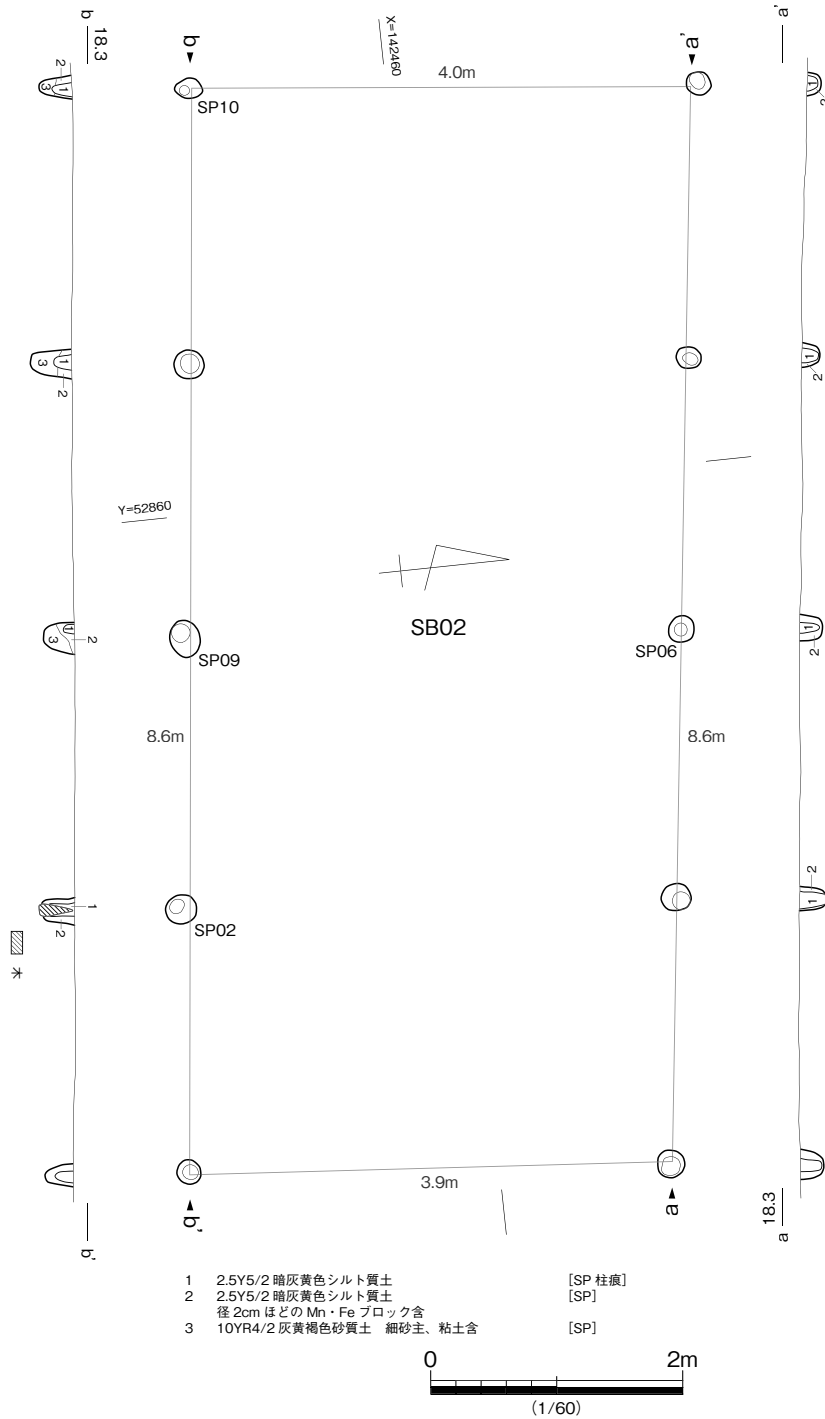
**時期** 埋土から近世の遺構と判断できる。

#### SK03・04 (調査時遺構名：1区南 SK03・04)

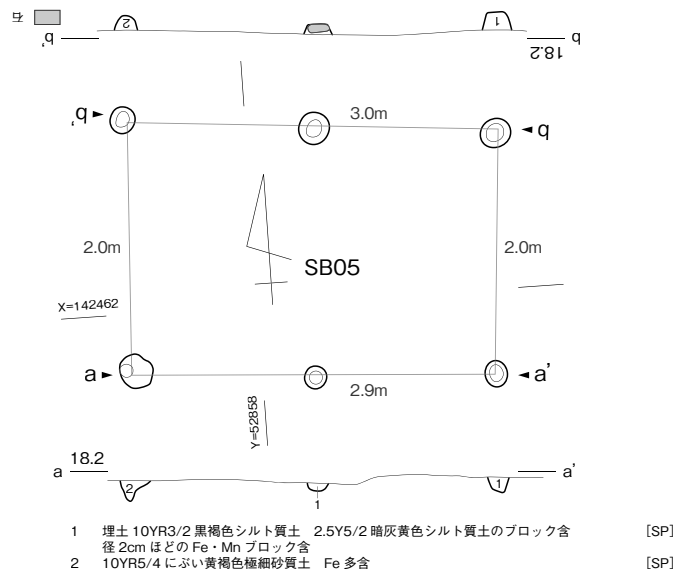
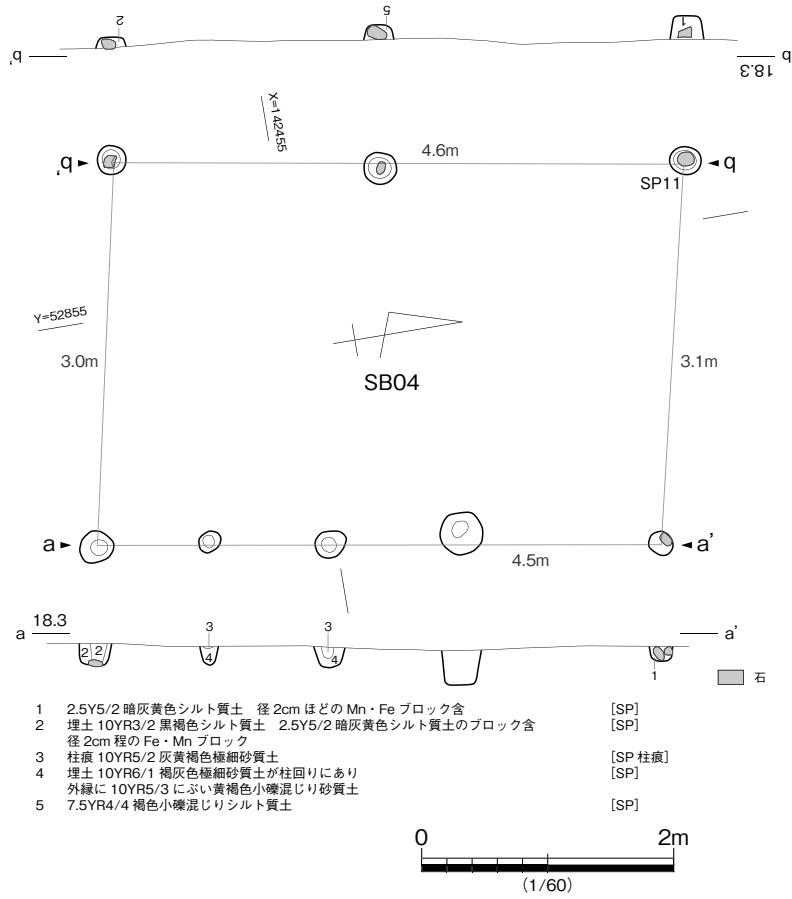
1区南の西端部で検出した2基の土坑である。SK03はSK04に後出する。両土坑埋没後に埋設管SD02が設けられている。SK03の平面形は2.4×2.1m以上のやや不整な円形を呈し、検出面からの深



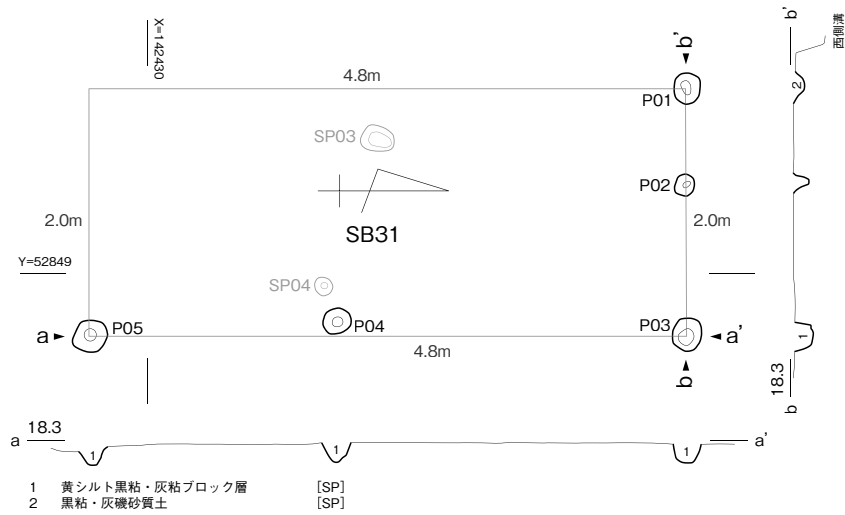
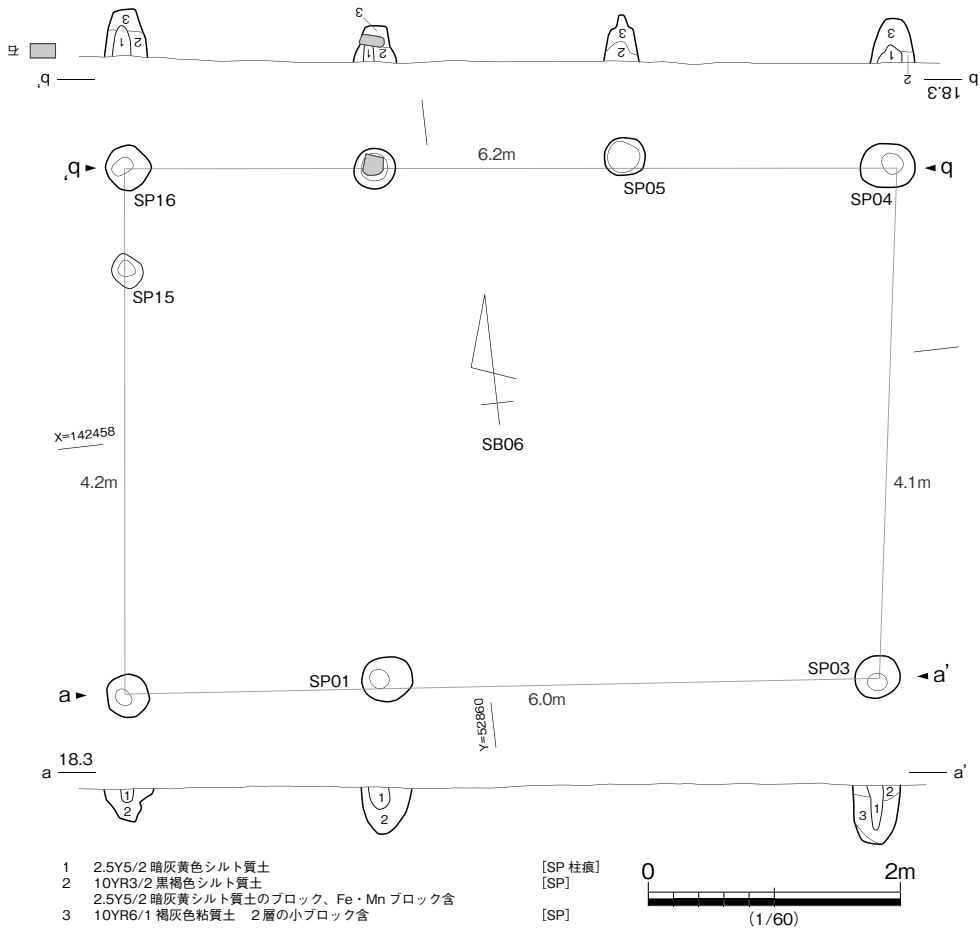
第 67 図 SB01・03 平・断面図



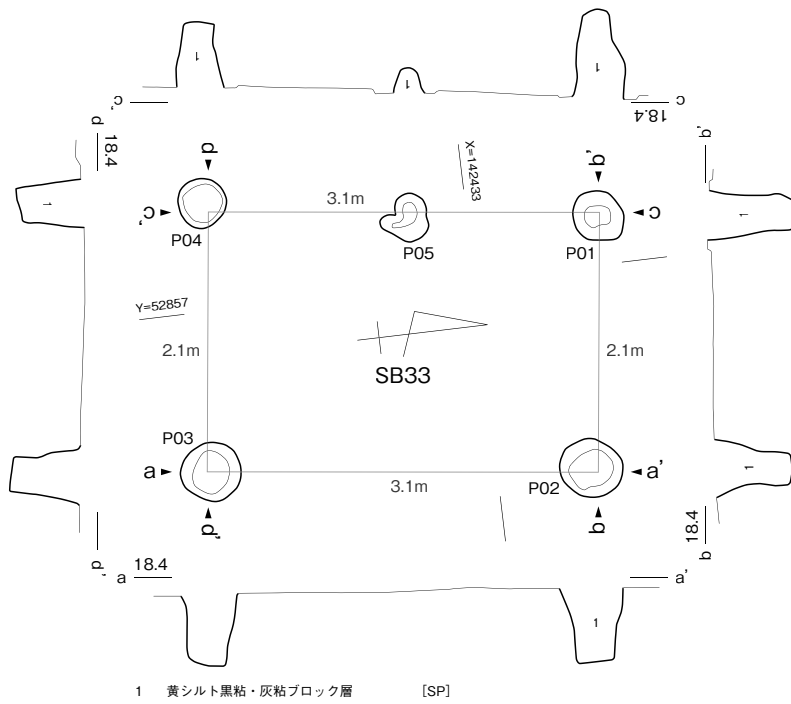
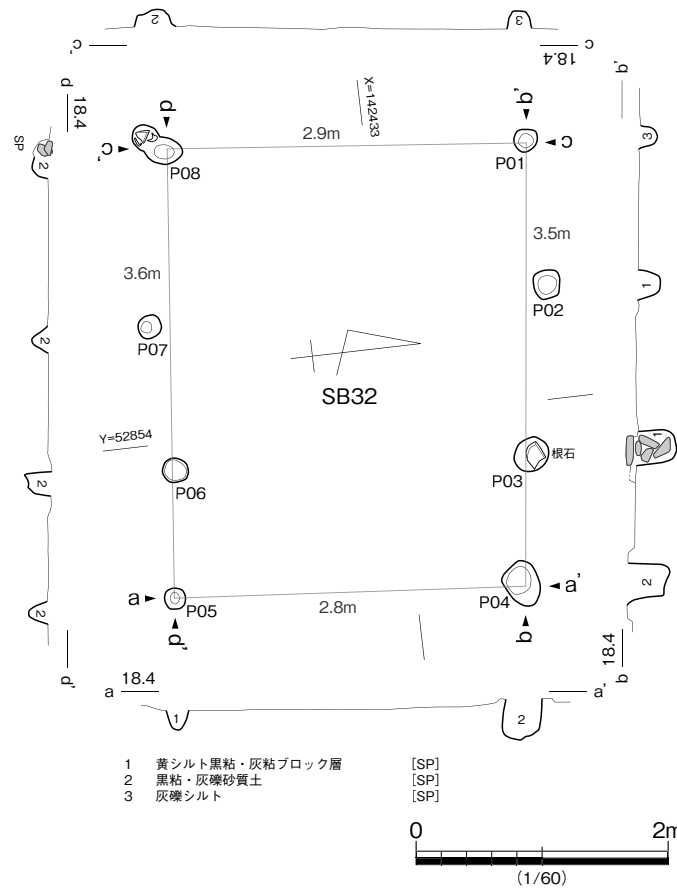
第 68 図 SB02 平・断面図



第69図 SB04・05 平・断面図

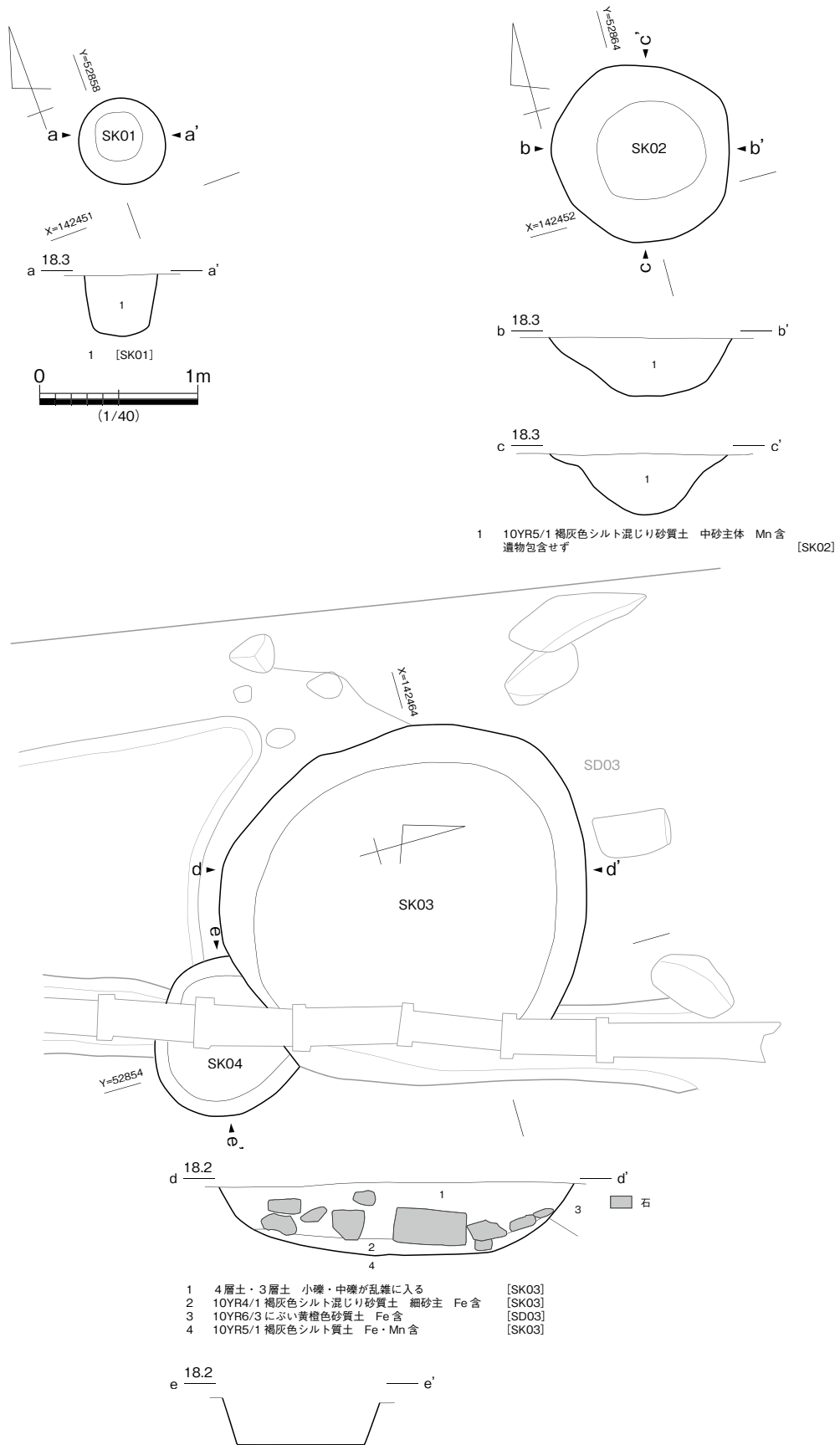


第70図 SB06・31 平・断面図

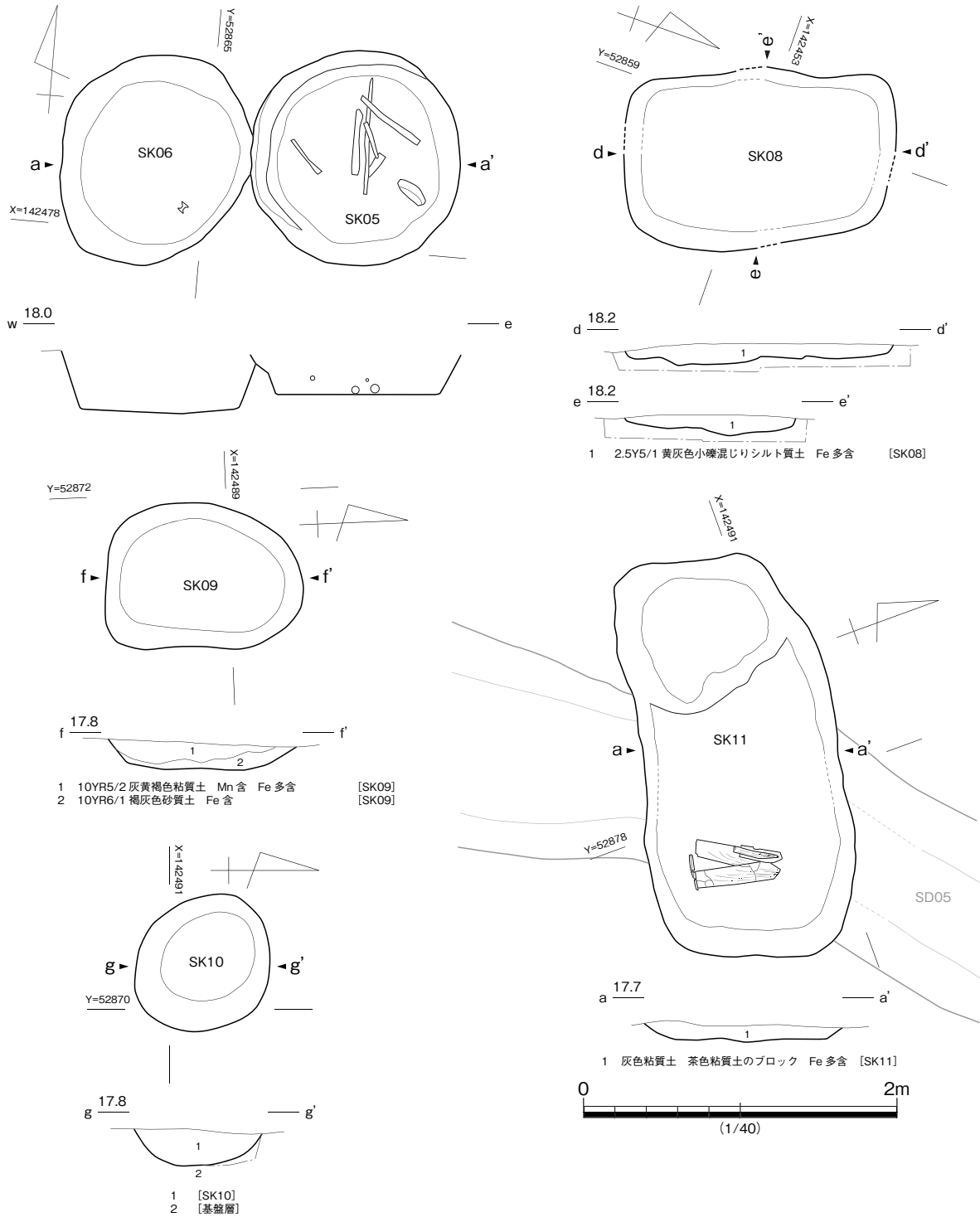


第71図 SB32・33平・断面図





第72図 SK01・02・03 平・断面図



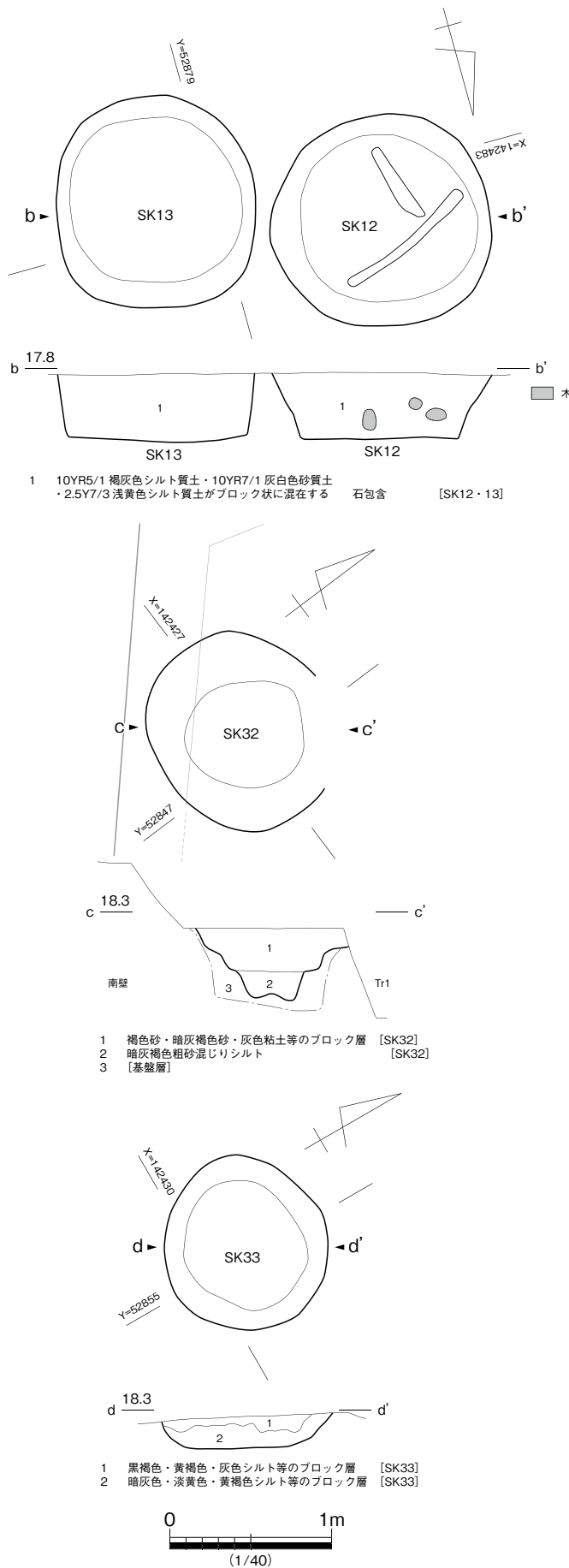
第 73 図 SK05・06・08～11 平・断面図

さは 0.5m である。SK03 の埋土中には大振りから小振りまでの礫が多量に混じる。SK04 の平面形は 1.0 × 0.9m 以上の円形で、検出面からの深さは 0.3m である。

**時期** 埋土から近世の遺構と判断できる。

**SK05・06（調査時遺構名：1 区北 SK05・06）**

1 区北で検出した 2 基の土坑である。SK05 の平面形は 1.4 × 1.3m の円形で、検出面からの深さは 0.3m



第74図 SK12・13・32・33平・断面図

である。SK05の底面付近には木が残っていた。SK06の平面形は1.4×1.2mの円形で、検出面からの深さは0.4mである。図化はしていないが、磁器の杯が出土している。

**時期** 出土遺物から近世と判断できる。

#### SK08 (調査時遺構名：1区南 SK08)

1区南で検出した平面形が隅丸方形の長方形の土坑で、長軸長は1.7m、短軸長は1.1mである。底面形状は安定しないが、検出面からもっとも深い箇所0.1mである。遺物は出土していない。

**時期** 埋土から近世と判断できる。

#### SK09 (調査時遺構名：2区東 SK09)

平面形が1.25×0.9mの不整な楕円形を呈する土坑で、検出面からの深さは0.2mである。底面からの立ち上がりはやや緩やかである。遺物は出土していない。

**時期** 埋土から近世と判断できる。

#### SK10 (調査時遺構名：2区東 SK10)

平面形が0.9×0.85mの円形で、検出面からの深さが0.2mの土坑である。遺物は出土していない。

**時期** 埋土から近世と判断できる。

#### SK11 (調査時遺構名：2区 SK11)

平面形が2.5×1.3mの長方形で、検出面からの深さが0.1mの土坑である。東端の底部には木が残る。

**時期** 埋土から近世と判断できる。

#### SK12・13

##### (調査時遺構名：2区東 SK12・13)

2区東の東部で東西に並ぶ2基の土坑である。平面形はSK13が1.3×1.2mの円形、SK12が1.4×1.3mの円形を呈する。検出面

からの深さは、いずれも 0.4m である。SK12 の埋土中には木が残存する。

**時期** 埋土から近世と判断できる。

#### SK32（調査時遺構名：0区 SK02）

平面形が 1.2m × 1.0m 以上の円形の土坑である。最終的にはブロックを含む土で埋まっている。遺物は出土していない。

**時期** 埋土から近世と判断できる。

#### SK33（調査時遺構名：0区 SK03）

平面形が 1.1 × 1.0m の円形で、深さが 0.2m の土坑である。埋土はブロック主体で構成される。遺物は出土していない。

**時期** 埋土から近世と判断できる。

### 溝

#### SD01

1区南の南西部を南北方向に流れる溝である。

**遺物** 550 は御厩系陶器焙烙である。

**時期** 550 から 18 世紀後半～ 19 世紀前半の埋没と考えられる。

#### SD03・04

1区南を東西に流れる石組を伴った溝である。図化はしていないが、木製の柄杓と下駄、漆製品も出土している。

**遺物** 551 は SD03 から出土した御厩系陶器焙烙である。

**時期** 551 から 18 世紀後半～ 19 世紀前半の埋没と考えられる。

#### SD20

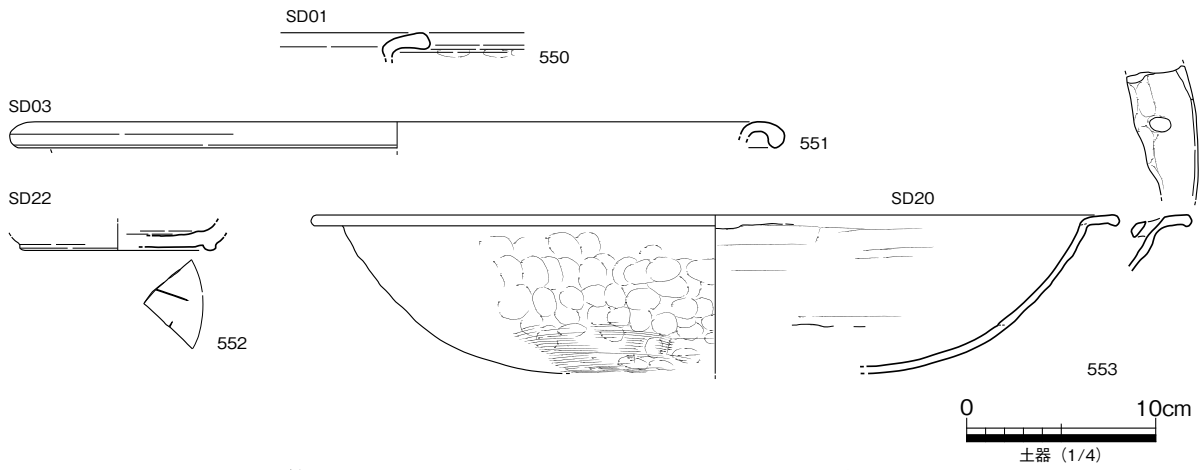
2区西を東西方向に流れる溝で、中世の SR03、SD19 埋没後に形成されている。

**遺物** 553 は御厩系陶器焙烙である。

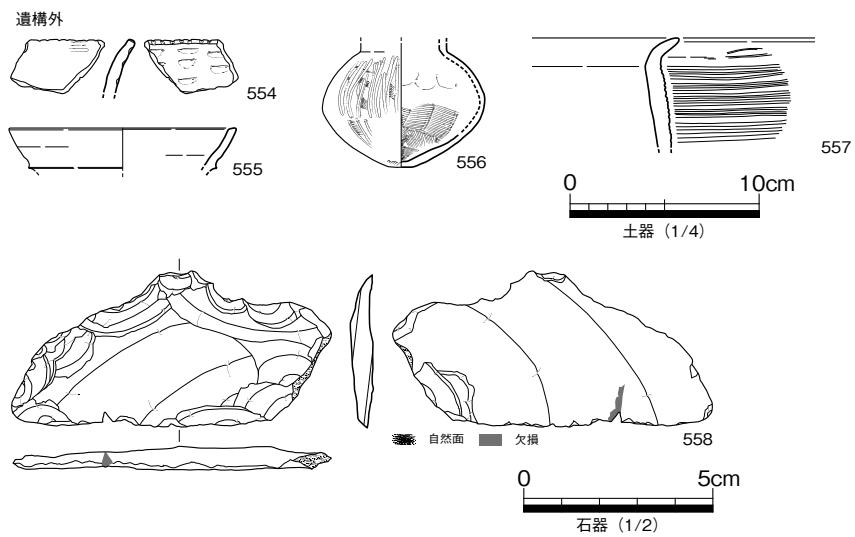
**時期** 553 から 18 世紀の埋没と考えられる。

#### SD21・22 出土遺物

**遺物** 須恵器杯 552 の底部見込みにはヘラ記号が刻まれている。



第75図 SD01・03・19・20・22 出土遺物実測図



第76図 遺構外 出土遺物実測図

### 3 遺構外の遺物

554 は縄文土器深鉢、555 は須恵器はそう、556 は弥生土器直口壺、557 は弥生土器甕である。サヌカイト製の剥片 558 は刃部に若干の使用痕が認められる。

#### 参考文献

香川県埋蔵文化財センター編 2005『香川県埋蔵文化財センター年報 平成15年度』香川県埋蔵文化財センター, pp.17～25

## 第4章 鎌野西遺跡の調査成果

### 第1節 調査の方法

南北に細長い鎌野西遺跡の調査地内には市道や水路が横断していたため、発掘調査時の土地区画に応じて調査区を設定した。調査区名は、北からC1区、C2区、B区、A区、D区とした。発掘調査面積は2,888㎡である。

発掘調査は平成13年度（2001年）、平成14年度（2002年）、平成15年度（2003年）に直営方式で実施した。耕作土や包含層は基本的には重機で掘削し、遺構は人力によって掘削した。

### 第2節 基本層序

第3章第2節で述べたように、鎌野西遺跡の基盤層は細砂～粗砂を主体とする層が大半を占める。これらの層は人間活動以前における自然河川の堆積層と考えられる。縄文時代晩期以降の遺構は埋没したこの自然河川を基盤層として形成されている。北方の北野遺跡で認められた古代以前の包含層は存在せず、縄文時代晩期～近世の遺構が同一面で検出された。遺構検出面の直上は、近年の床土や耕作土である。

### 第3節 遺構と遺物

#### 柵

##### SA001

B区中央部で検出した東西方向の柵である。方位は周辺の条里地割とおおむね合致する。遺物は出土していない。

**遺物** 柱穴03から前期とみられる弥生土器小片が出土している。

**時期** 埋土と方位から近世、少なくとも中世以降と考えられる。

#### 土坑

##### SK001・003

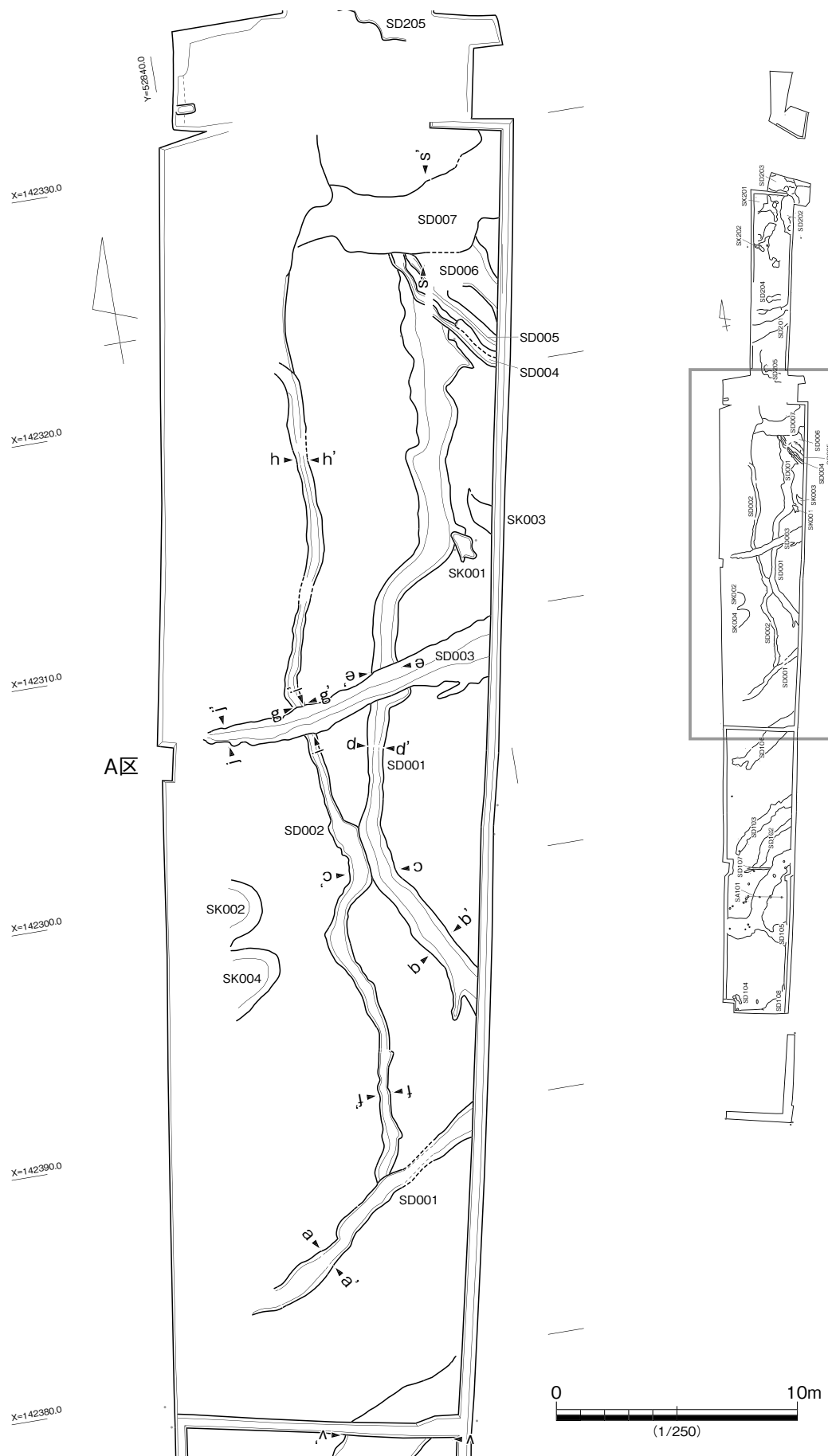
A区北東部で検出した平面形不定形の浅い土坑である。SK001は弥生時代前期の溝SD001埋没後に築かれている。遺物は出土していない。

**時期** 埋土から近世以降と考えられる。

##### SK002・004

A区南西部で検出した土坑で、2基が並んでいる。規模も底面標高もほぼ同じであるため、両者は関



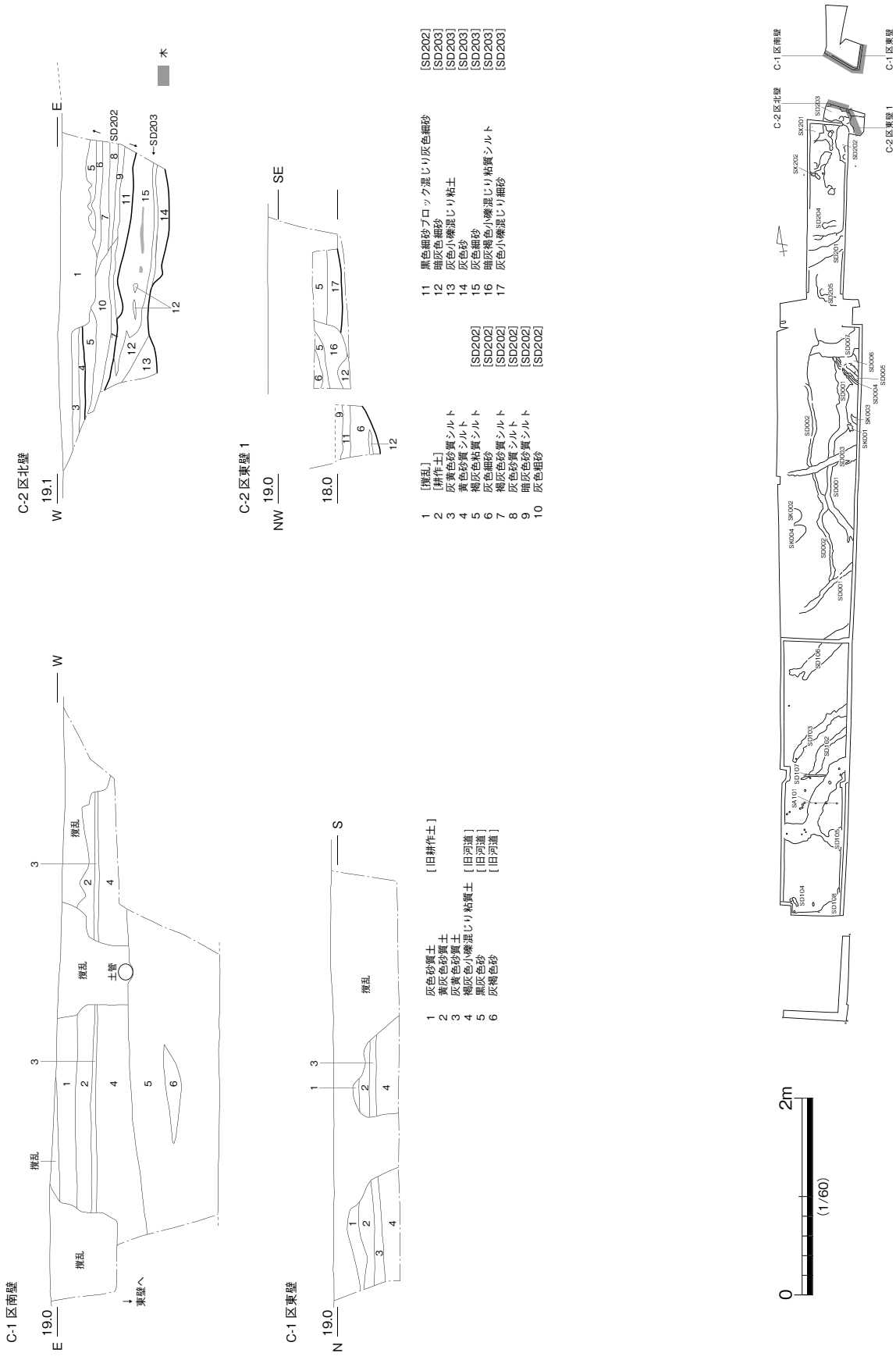


第78図 遺構配置図2

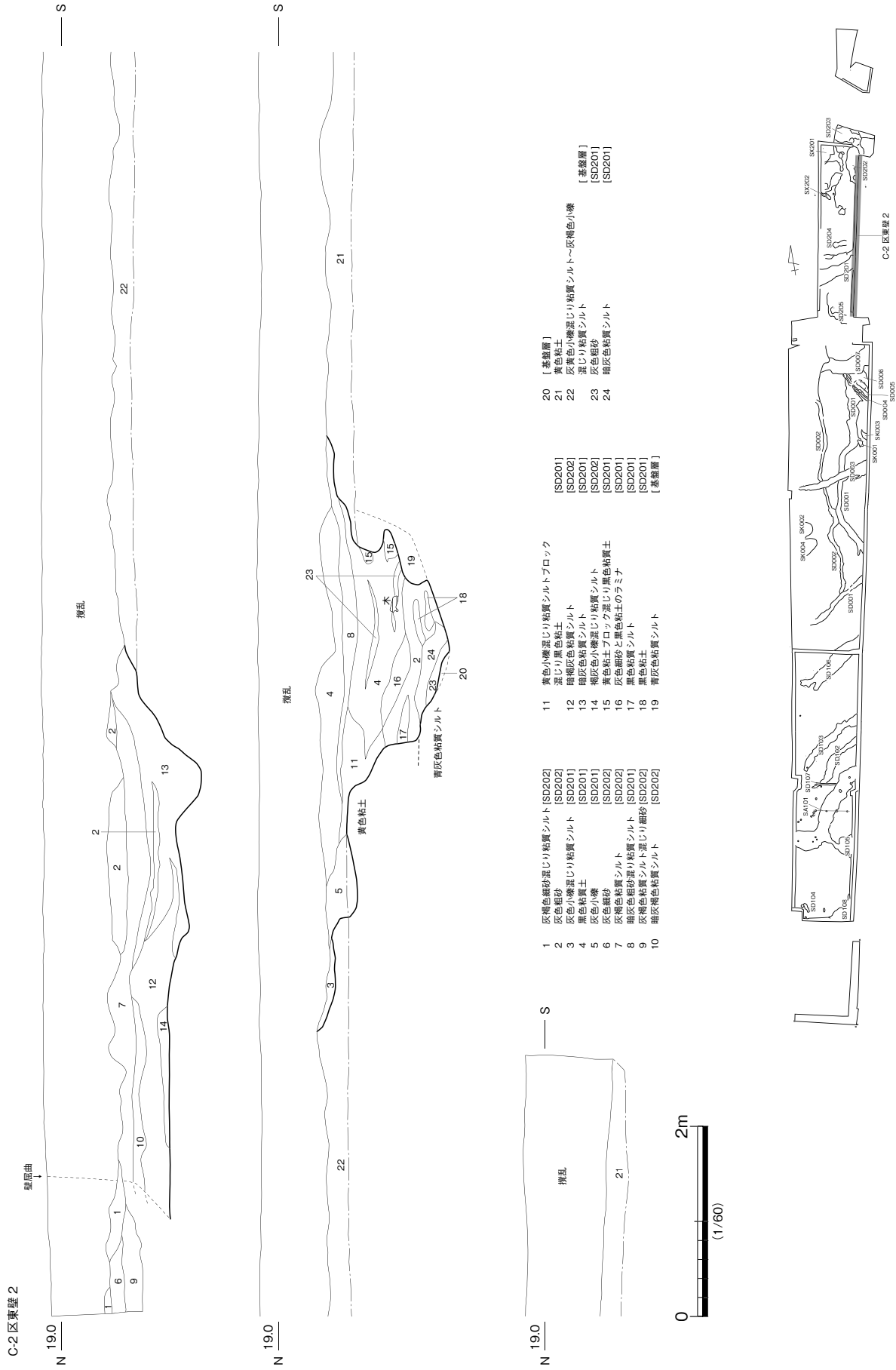




第79図 遺構配置図3

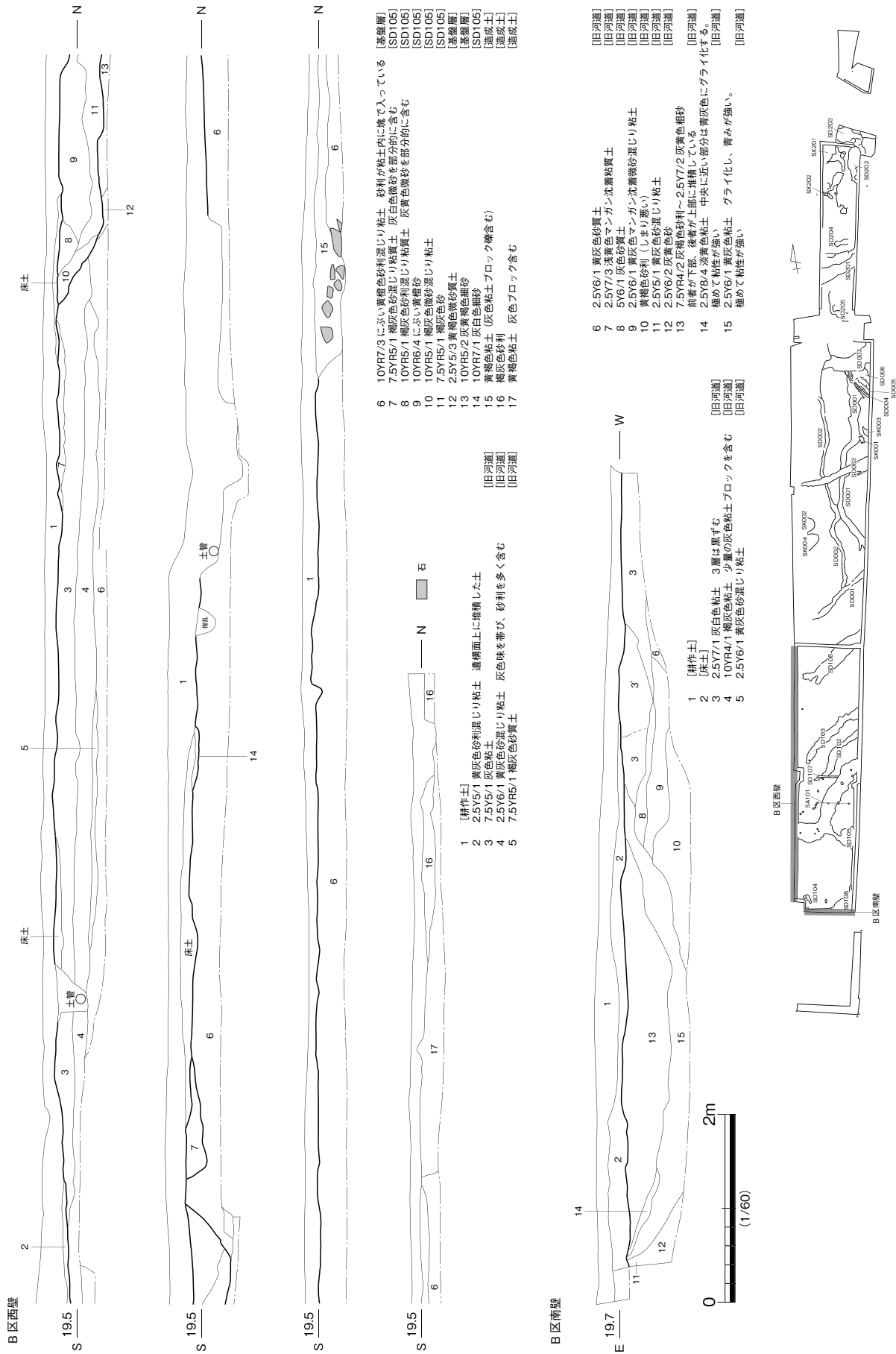


第80図 C-1 区南・東壁・C-2 区北・東壁断面図

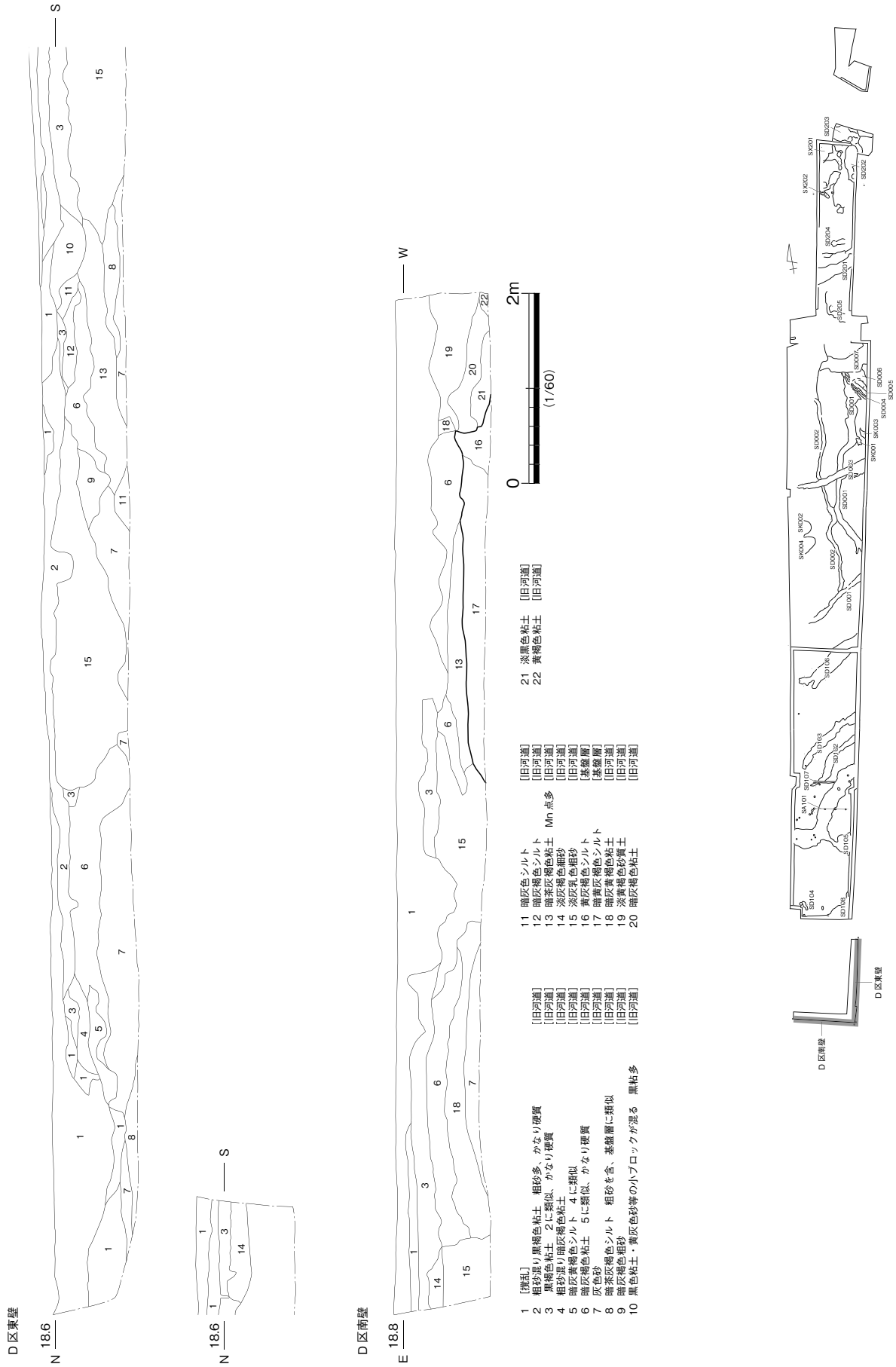


第81図 C-2区 東壁断面図





第83図 B区西・南壁断面図



第84図 D区東・南壁断面図

連する土坑であろう。遺物は出土していない。

**時期** 埋土から近世以降と判断できる。

## 溝

### SD001・002

A区をおおむね南北方向にやや蛇行しながら流下する溝である。A区南部でSD001・002は接するが、当該箇所ではSD001からSD002が分岐する蓋然性が高い。周辺地形からみて南から北へ流れる溝だろう。

**遺物** 1は縄文土器深鉢である。内外面ともに磨滅が著しく器面の一部が剥落している。2は弥生土器甕と思われる底部である。こちらも器面の剥落が認められる。3はサヌカイト製の剥片である。上端部には自然面が残る。風化が著しく、縄文時代以前の可能性がある。図化していないが、後期の可能性のある弥生土器小片が出土している。

**時期** 2から弥生時代前期としておくが、図化していない弥生土器小片が遺構の時期を示すのであれば弥生時代後期の可能性もある。

### SD003

A区中央部をほぼ東西に流れる溝である。弥生時代前期のSD001・002埋没後に形成されている。

**遺物** 4～6は弥生土器である。4の高杯は脚部のみ残存する。小破片の5は鉢とした。6の台付鉢は口縁上端部に2条の凹線文が施される。6は今回の調査で中期後葉に属することが確実な唯一の遺物である。

**時期** 4・5から弥生時代後期後半の埋没と考えられる。

### SD007

A区北端部をほぼ東西方向に流れる溝である。遺物は出土していない。

**遺物** 7はサヌカイト製石鏃である。平基式で両面には周縁から調整が施される。

**時期** 埋土や方位、周辺遺構から弥生時代後期としておく。

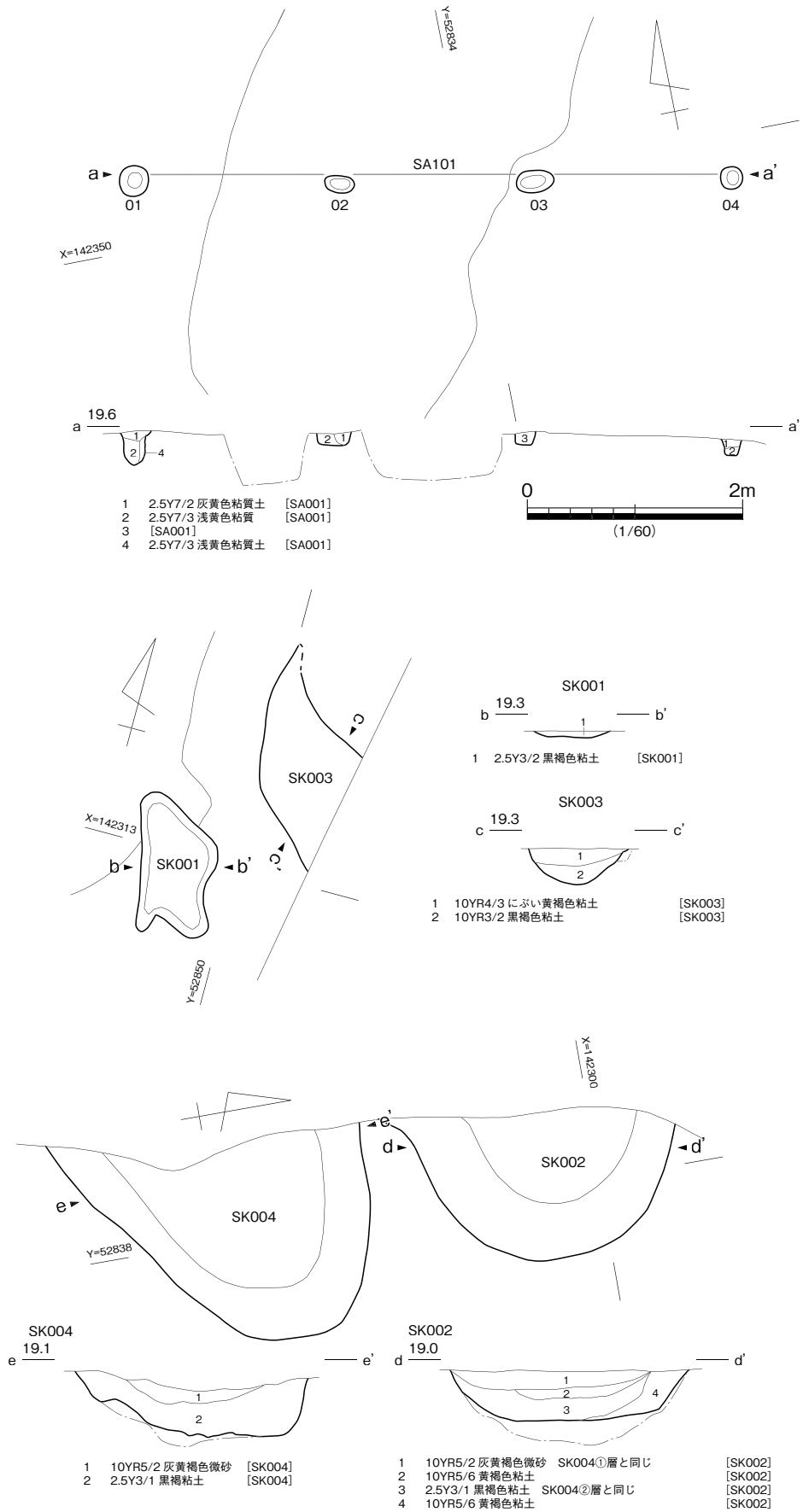
### SD101・102・103・106

B区北半部で検出した南西-北東方向の溝である。SD101・102は同一の溝だろう。一部からサヌカイト製の小さな剥片が出土しているが、土器は出土していない。

**時期** 調査時の記録や観察所見が乏しいため時期決定が困難だが、主軸が条里地割の方向と異なるため7世紀以前であることは確実である。また、SD201(弥生時代後期後半埋没)と主軸方向が類似する点、今回の調査では古墳時代～7世紀の遺物が出土していない点から、弥生時代後期の可能性を考えておきたい。

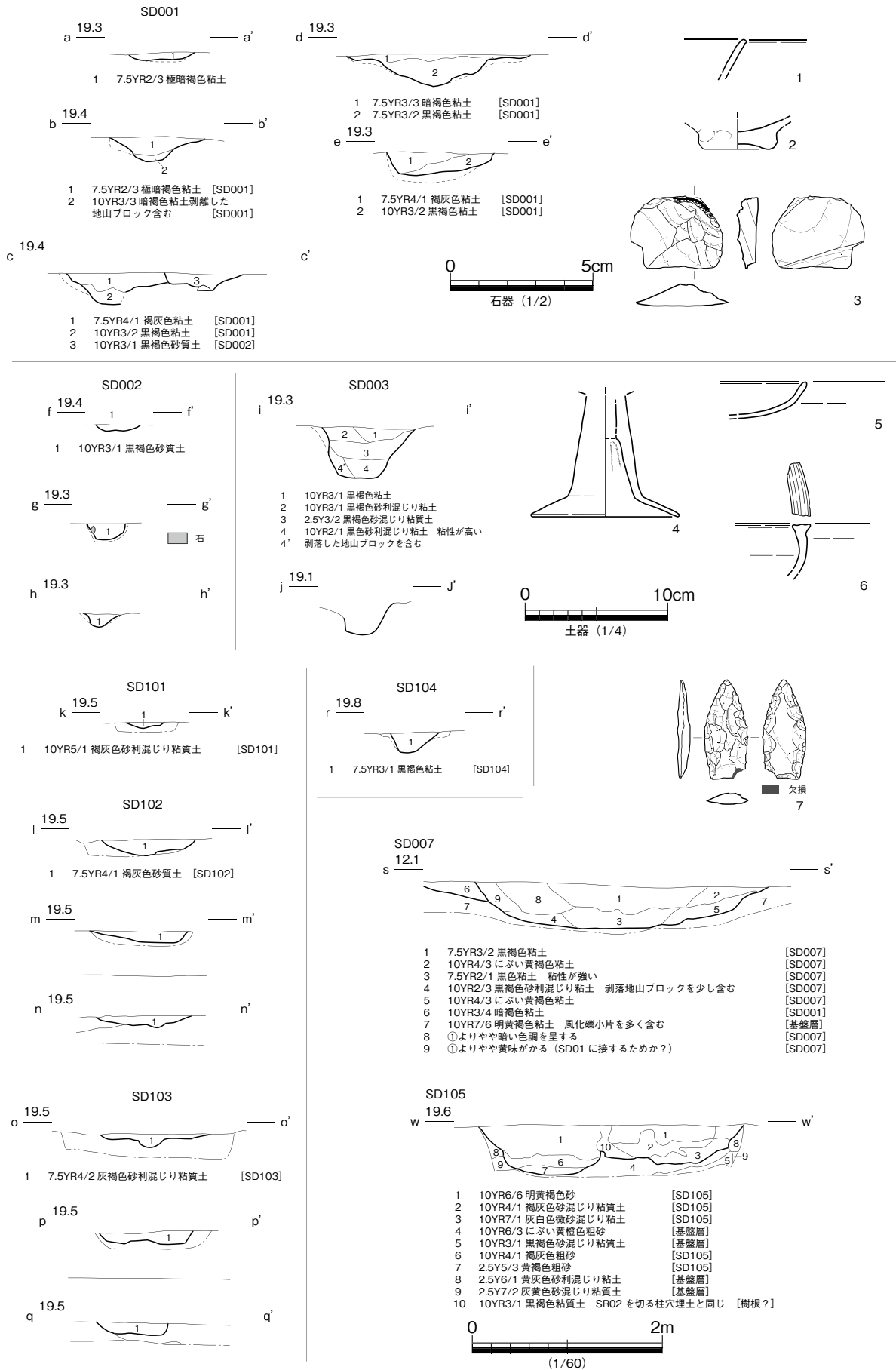
### SD201

C2区中央付近南西から北東にかけて流下する溝である。断面形状から水路と考えられ、この場合、周辺では規模の大きな水路となる。底部付近にはラミナ状の堆積と細砂～粗砂層が認められ、中位より

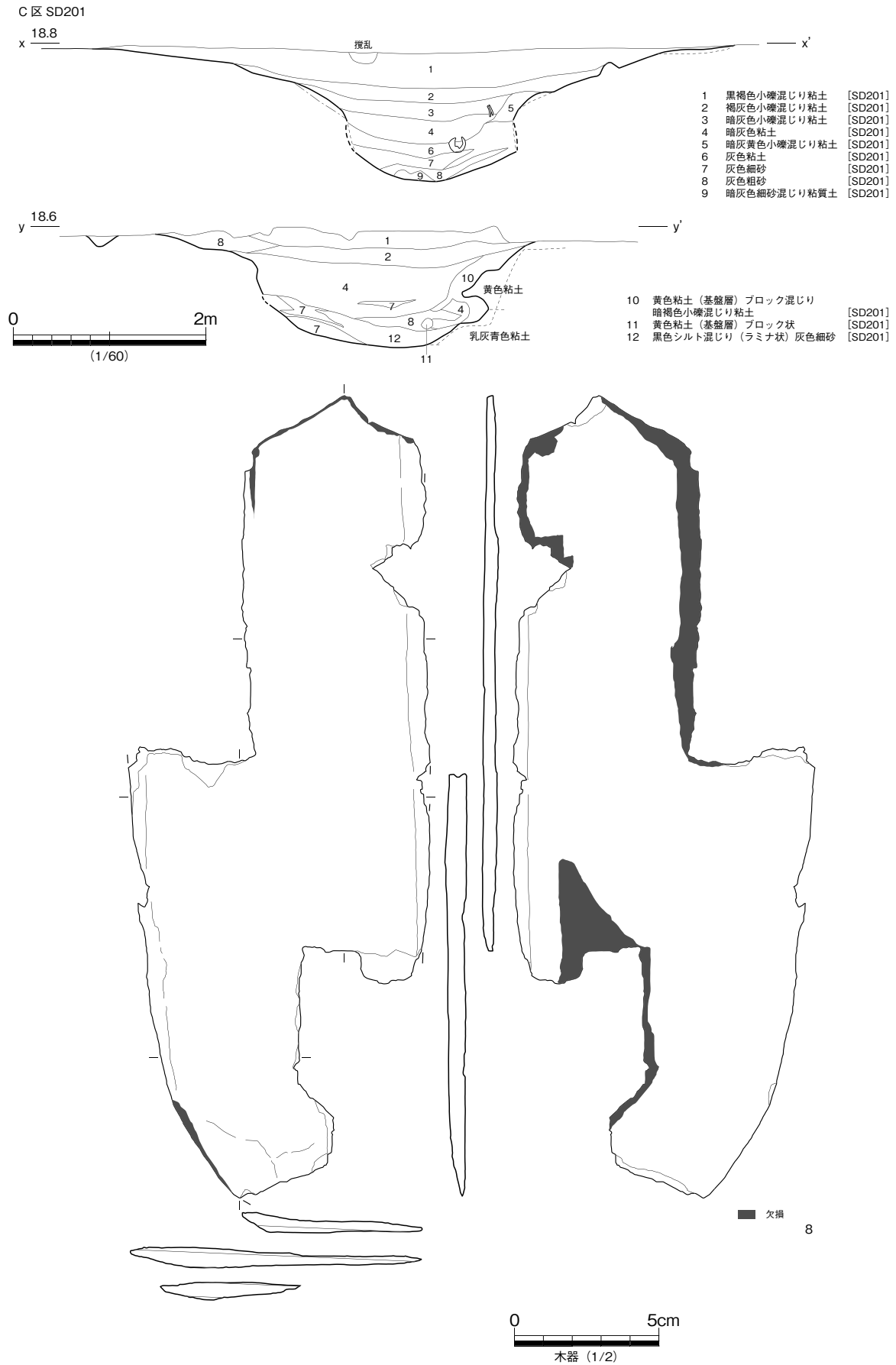


第 85 図 SA101・SK001～004 平・断面図

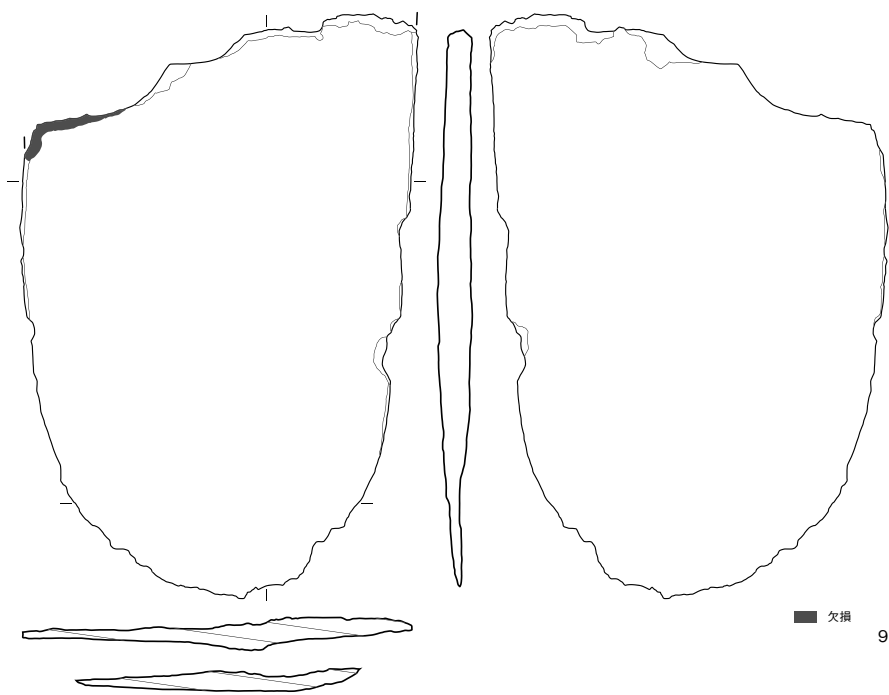




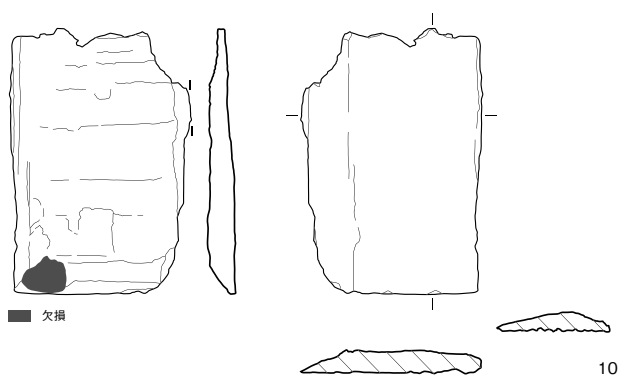
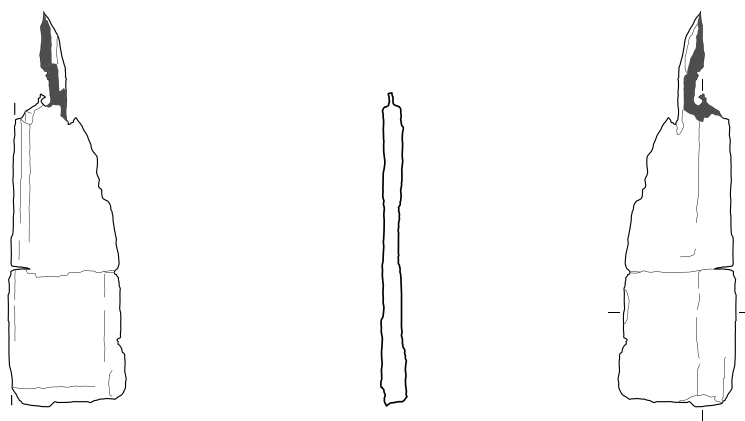
第86図 SD001 ~ 003・007・SD101 ~ 105 断面図・出土遺物実測図



第 87 図 SD201 断面・出土遺物実測図 1



■ 欠損 9

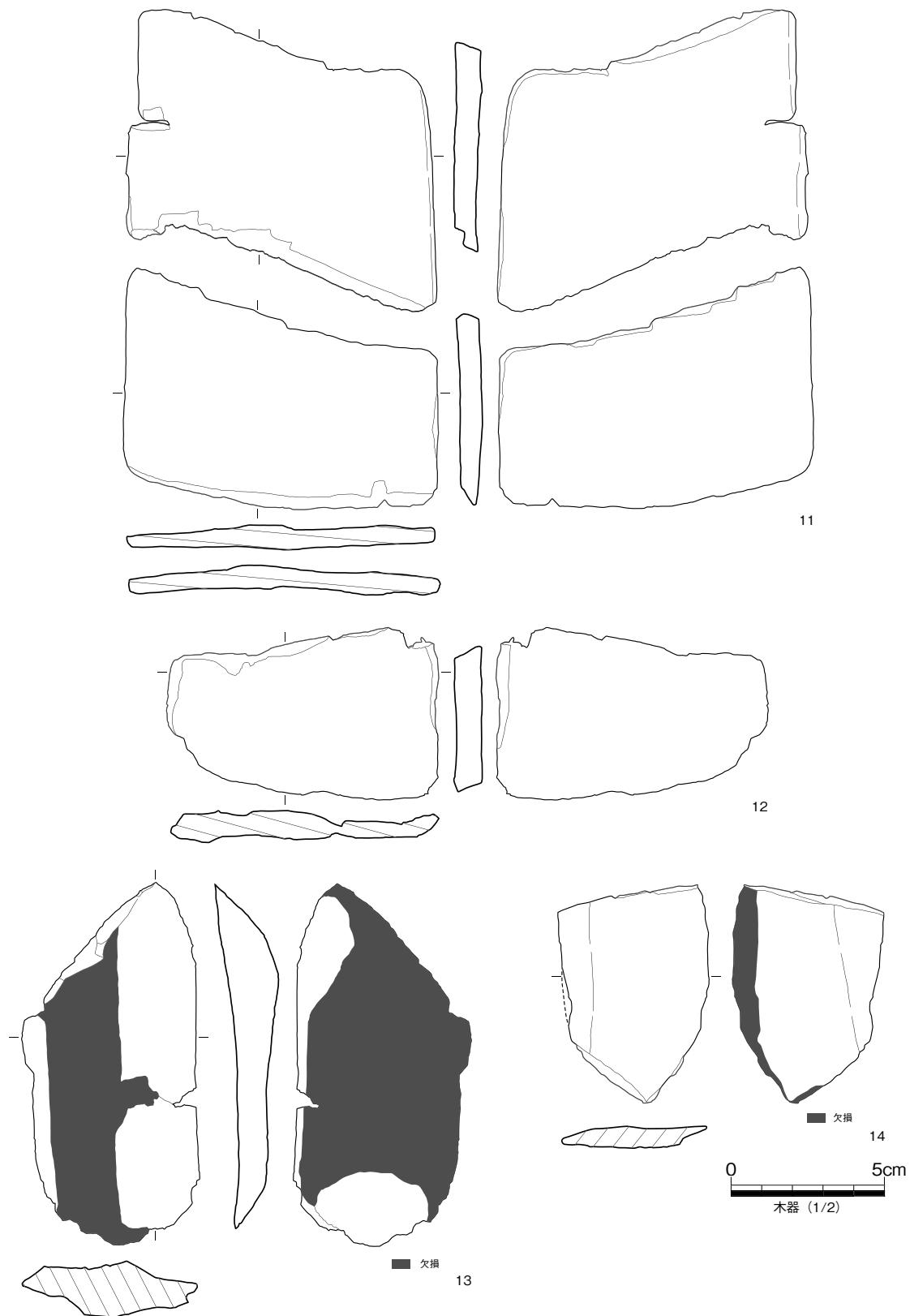


■ 欠損

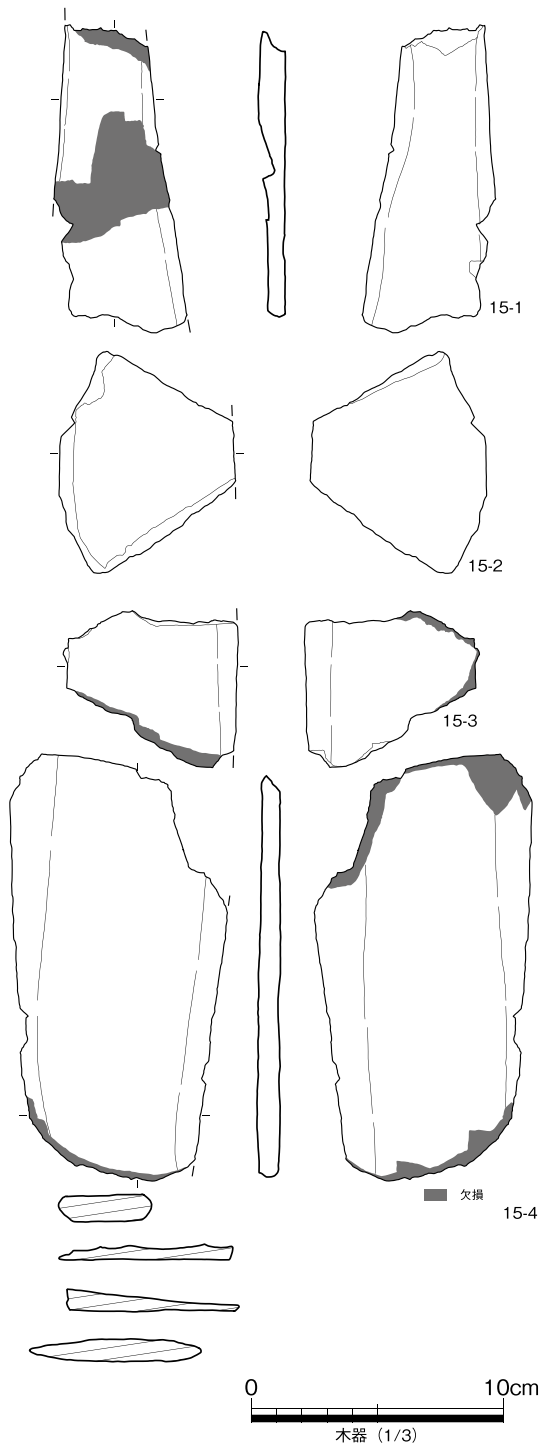
0 5cm  
木器 (1/2)

10

第88図 SD201 出土遺物実測図2



第 89 図 SD201 出土遺物実測図 3



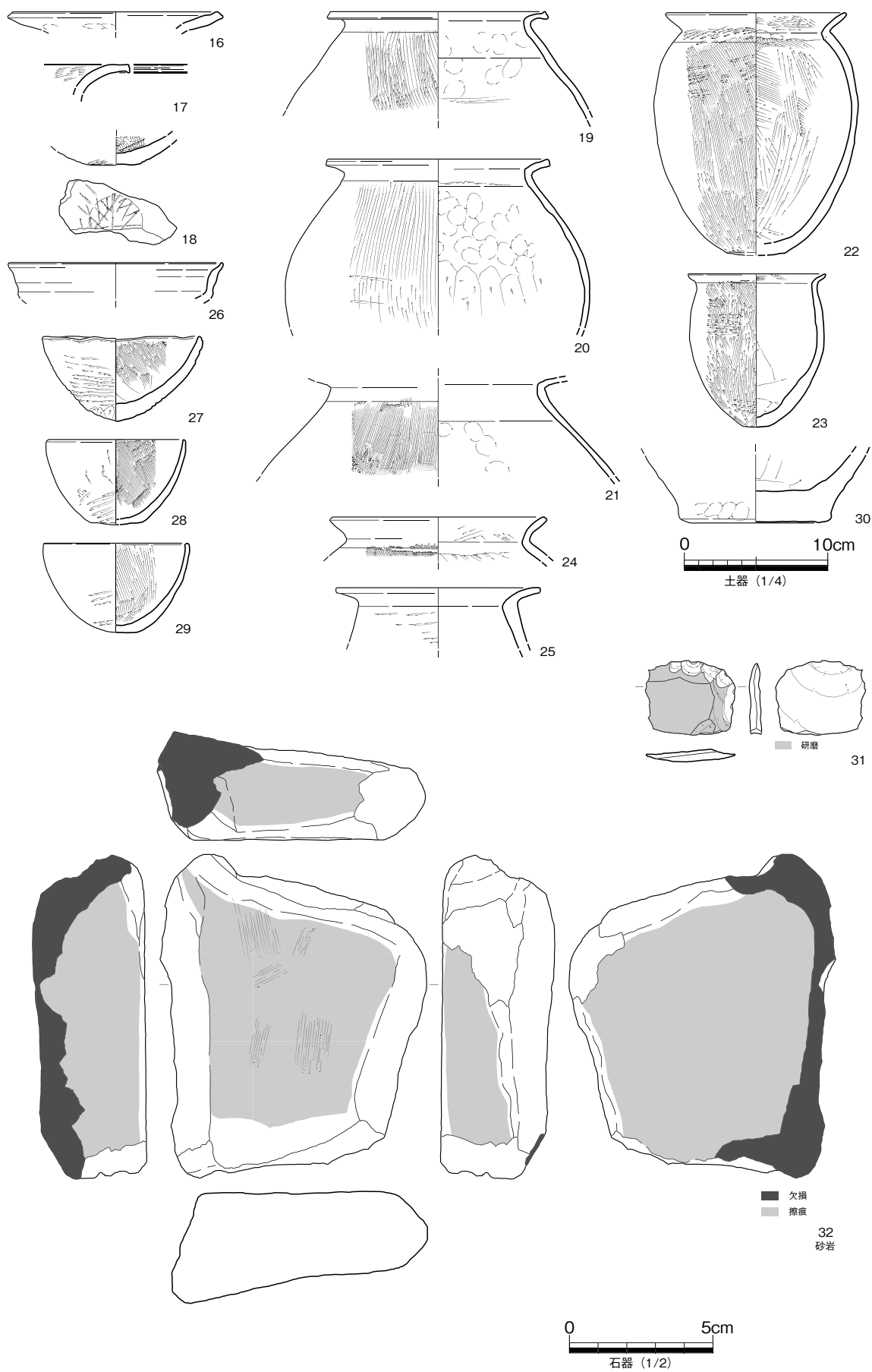
第90図 SD201 出土遺物実測図4

下流域産の甕である。20の外面には煤が残る。22の胎土は灰黄色～浅黄色で、直径5mm程度の石英粒を含む。焼成は良好で、外面底部から口縁端部にかけて煤が付着している。23の胎土は22に近い。焼成も良好である。外面には絞り目が残る。外面底部から口縁部にかけて、内面の頸部より下位に煤が認められる。24は焼成が良好な厚手の甕である。胎土の色調は明褐色で、角閃石や黒雲母の含有は確認されない。外面には口縁部まで煤が付着している。25は胎土の色調が橙白色～明橙色で焼成はよくない。空港跡地遺跡で比較的多く出土する白色系土器だろう。26は香東川下流域産の高杯である。

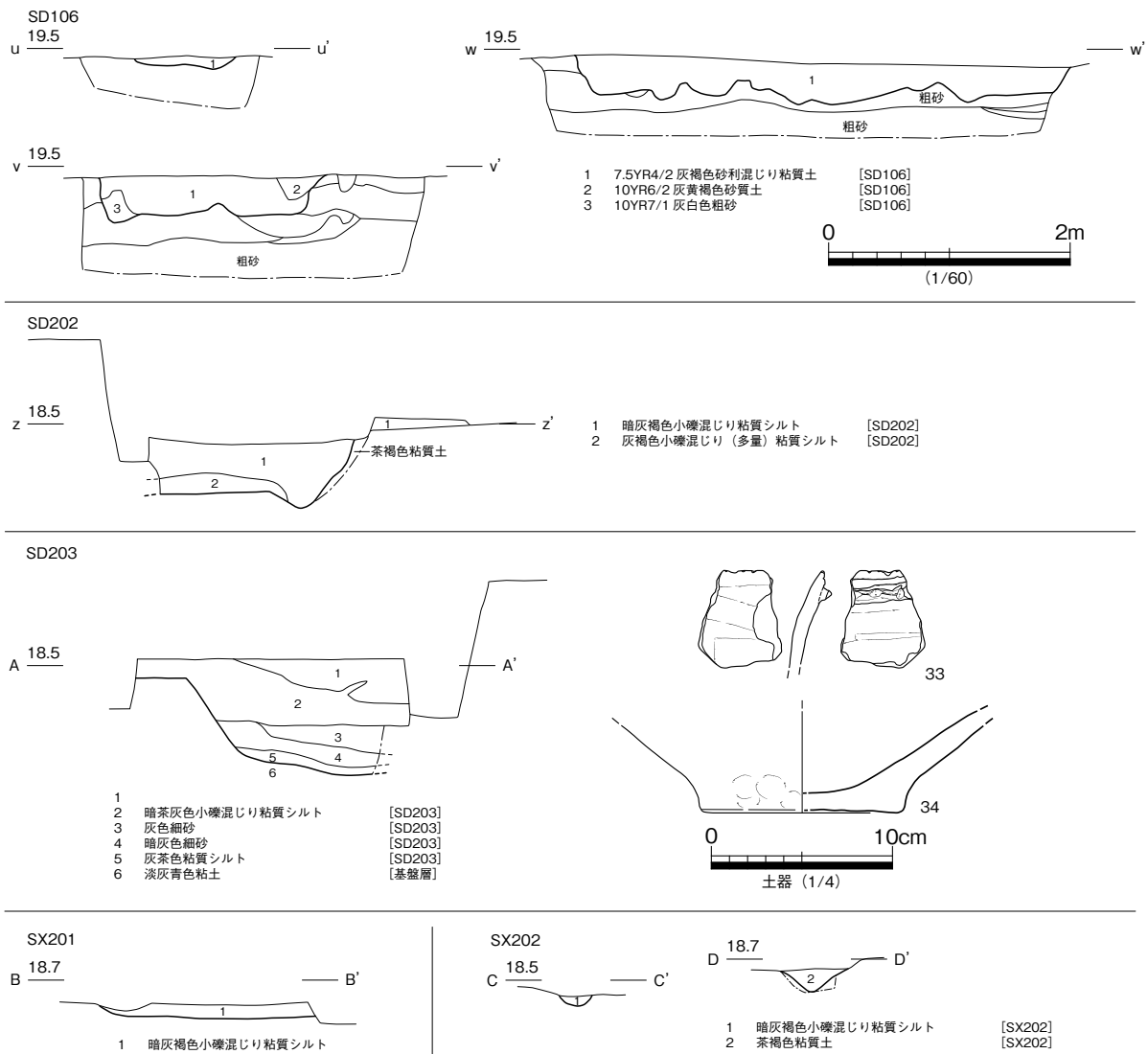
上層は褐灰色～黒褐色粘土層が堆積する。活発な流下後は窪地状となり、ある程度の時間をかけて埋没したのだろう。木器のいくつかは流化活動後の堆積の初期とみられる層から出土しており、窪地状となった本遺構に廃棄されとみられる。

8～15は木器である。8・14・15はブナ科、9・11・12はブナ科コナラ属アカガシ亜属である。鋭角に削り出された両端部は、下方にかけて弧を描く。両端部から下端部を刃部とする器種であろう。9は半楕円形に残存し、8と同様に縁辺は鋭角に加工されている。こちら刃部をもつ器種とみられる。10は接合しない箇所もあるが、厚さが近いので、同一個体として図化した。それぞれ残存する長辺側が、主に表面からの加工により鋭角となっている。下端も同様である。11についても接合しないが、幅、厚さが近い点を考慮して同一個体と判断した。左右両端は面をもち、下端部は表面からの削り出しで鋭角となる。12は11よりも厚く、刃部と推測されるような鋭角な縁辺は残っていない。13は欠損部分が多く復元が難しい。元は3.0cm以上の厚さのあるものと推測される。14は左側縁が両面からの加工により鋭角となる。15は接合しない箇所が複数あるものの、同地点からの出土であるため同一個体として復元した。図の上方から各破片を、15-1、15-2、15-3、15-4として記述する。15-1は他の破片に比べて若干厚く細身である。両側縁は丸みを帯びる。15-2の残存する右側縁は面を有する。15-3の右側縁部と15-4の両側縁部は鋭角に加工されている。15-4の両側縁部は下方に向かって収束しつつある。15-1を柄とし、15-3・15-4を刃部とする鋤と推測される。

16～29は弥生土器である。16・17は壺、18は壺、または甕と思われる。18の底部外面には葉脈痕が認められる。19～21は胎土に細かな角閃石を含む香東川



第91図 SD201 出土遺物実測図5



第92図 SD106・202・203、SX0201・202 断面図、SD203 出土遺物実測図

27～29は鉢で、胎土は22や23の甕に近い。30は前期の壺底部である。

サヌカイト製の31はA面の上端、左側縁に調整が確認できることから加工痕のある剥片とした。A面の一部には研磨が認められる。32は砂岩製砥石である。下半を欠損するが、風化の状況から使用時期にまで欠損時期がさかのぼる可能性もある。5面に擦痕が確認される。

時期 19～26から弥生時代後期後半の埋没と判断できる。

### SD203

C2区北部で蛇行する自然河川である。SD202、SX201・202と同一の自然河川の可能性がある。

遺物 33は縄文土器深鉢である。口縁部は緩く外反し、外面の端部よりやや下がった位置に突帯を有する。34は弥生土器壺の底部である。

時期 34から弥生時代前期の埋没と考えられる。